

地方と都市を結ぶホットライン・マガジン

DePOLA

でほら

25

2003年

秋冬号

特集

太陽と風、土のぬくもりが好き 私のオフィスは自然郷



宝くじ

本誌は、宝くじの普及宣伝事業として作成されたものです。



竹内園芸で働く大西和枝さん



無農薬チンゲンサイに取り組む武政二三彦さん



花卉栽培をする平尾博子さん

「太陽と風、土のぬくもりが好き—私のオフィスは自然郷」 特集企画によせて

Aさんは大学を出て、「三」の会社を転職しながら、いつか田舎へ行って農業をしたいと思つたようになった。もうすぐ30歳、結婚して来年は子供も生まれそうだ。しかし、自然の中で暮らしたい、農業をしたいと思つても、農地を購入し作物を作つて、それで生計を立てていくのが難しいことは充分解つている。自然が豊かな地域の農業関連会社で給与をもらつて食べていくことは出来ないだろうか。「オフィスは自然郷だ」と決意したAさんはハローワークへ足を運んだ。

しかしそのような職種の募集はどこにもない。やっと一件見つけたが、春から秋までのアルバイト募集だった。それでも諦める気持ちになれなくて、両親や奥さんに、俺は農民サラリーマンになる」と宣言して会社を辞め、各地へ問い合わせた。ニューファーマーズフェアに顔を出した。そこで各都道府県や市町村が行っている新規就農者の研修施設や農業法人の研修生募集等の情報を得ることが出来た。

Aさんは北海道十勝地区の農業体験学校に3ヶ月研修に行き、農業法人の会社へパートタイマーで就職した。冬は農機具の会社で働き、トラクター等の運転技術を手につけた。現在Aさん一家は、幸福の駅「近くのマンションに住み、農民サラリーマンとして働いている。夢は大豆栽培と加工品づくり。十勝産のあらゆる豆類を栽培して、安全で美味しい豆腐、味噌、納豆などを製造すること。採用してくれた会社に加工所を開設して、その工場主任として働きたいと思つている。

過

疎市町村にとつて、若い世代の定住政策が重要な課題になっている。そのキーワードは農林漁業の活性化である。しかし二十数年間、農業では食べていけない。「苦労ばかり多くて割が合わない」と言われ続けて、担い手不足、高齢化、休耕田が進行し、それが地域の活力低下を招いてきた。自営農業を主にする農業就業人口は、ここ数年だけ見ても、毎年4万人近く減少している。

一方、農業を始める人も徐々に増加している。平成2

年が4万5700人と最も少なかったが、その後は新規就農者は増え続け、平成12年には若年（39歳以下）が1万1600人、中高年（40歳以上）が6万5800人になっている。（農業構造動態調査）

これは自然志向の高まりや人々の職業意識、社会情勢の変化と、国、都道府県、市町村が本腰を入れて専業農家や地域営農の育成、新規就農者の受け入れに力を入れてきたことによるものである。

「では」では第6号（平成5年9月発行）で「新しく農業をはじめ、新規就農者たちの生活と意見」特集を行っているが、10年経ち、農業を始める人の意識や受け入れ側の体制が大きく変わった。以前は研修後に農地を購入（借用）、施設を整備して、独立して農業に取り組む人が多く、そのためにかんがりの自己資金と、農業で自立していくための「覚悟」が必要だった。

しかし現在は農業法人や企業に入社して賃金をもらつて働くケースが増えている。まさにAさんの希望した「オフィスは自然郷」「農民サラリーマン」の出現である。今回各地を取材して、農業の集約化や近代化をはかり新規就農者を積極的に採用している農業法人や会社が多くなったことを実感した。そこで若者は生き生きと満足して働いており、またパート等で働く地域のお母さんたちにとつても大切な雇用場になっていた。そしてそこには、地域の農業活性化や農作物の価値や差別化、流通の改革により、農業を新しい企業体として捉えて実践している経営者（リーダー）がいた。

一方、最初から独立して営農する人には、研修制度や施設のレンタル、支援金助成制度があり、自己資金ゼロでも対応していけるようになった。彼等がムラに来て農業で食べている姿を見て地元青年が農業を後継したり、Uターンするケースもあり、地域に「元氣」を与える要因の一つになっているのではないかと期待したい。

冷夏の影響は？ 台風の被害は？ などと取材先のことを気にしながら本誌をまとめた。

「では」編集部/財団法人過疎地域問題調査会

「太陽と風、土のぬくもりが好き——私のオフィスは自然郷」
特集企画に寄せて—— 2



北の大地に魅せられて

花の里・月形で[花]を咲かせる/
花卉農家で独立 (北海道月形町)—— 4

- ・「岩の白扇」を主体に花栽培に夢中 / 宮下勇作さん—— 5
- ・北国の風を感じる草花づくり / 平尾元一さん—— 6
- ・研修中の夫婦二組が就農準備—— 7

第二のふるさと・新得で夢を育む
レディースファームスクール
修了生たちはいま

(北海道新得町)—— 8

集落が丸ごと“美味しい”農場
観光農園「にしかみ」北海道鹿追町—— 11

ムラ人の期待と笑顔に支えられて

大江町 (山形県) で「都会的田舎暮らし」

仲間の協力でトマト栽培も順調 / 山川正信さん—— 14

若者が農業で食べていけるムラに

企業化して流通まで一貫 / (有)石動農産 (佐賀県東脊振村)—— 16

豊島へ帰ってレモン栽培 / 岡本満さん (香川県土庄町)—— 19

ネイチャーランド和田町 (千葉県) で自給自足的生活を /

菅原文好さん—— 20

四国の高原からとびきり美味しい野菜を

若者が高地で高糖度トマトに挑戦

- ・スカイファーム「ぴゅあトマト」(高知県吾川村)—— 22
- ・過疎の村を高級トマトの産地に / 西森常晴さん—— 25

最新の育苗工場は都市からの若者で
大賑わい / (有)竹内園芸

(徳島県板野町)—— 26

レンタルハウスで施設園芸

特産のイチゴ、無農薬野菜を

(高知県佐川町)—— 30

- ・夫婦で独立して佐川特産のイチゴ栽培 / 加藤佳光さん—— 30

- ・家族の協力を支えられて無農薬チンゲンサイ栽培 / 武政二三彦さん—— 31

INFORMATION—— 33

農業を始めませんか！新規就農ガイド

(財)過疎地域問題調査会からのお知らせ

編集後記/奥付



「でぼら」とは——

Depopulated Local Authorities (人口が減少した、つまり過疎化した地方自治体)からのネーミング。わが国の過疎市町村の数は1288(過疎地域市町村1203と過疎地域市町村に準ずる特定市町村85の合計)、全市町村の40%を超えています。過疎市町村は豊かで貴重な自然環境に恵まれ、伝統文化や人情あふれる風土が数多く残っています。

多くの人たちが過疎地域を理解し、交流をすすめるために、過疎地域と都市地域を結ぶホットラインとして、また過疎地域相互間の情報誌として、「DePOLA でぼら」をお届けします。回覧し、多くの方にご覧いただければ幸いです。

表紙 写真

左上/スカイファーム「ぴゅあトマト」を栽培する3青年(高知県吾川村)

左下/観光農園「にしかみ」で働く加藤一美さん(北海道鹿追町)

右上/エコファーマーの認定を受けてトマト栽培をする山川正信さん一家。3年前に新居も建築した(山形県大江町)

右下/西上経営組合が運営する「にしかみ」での草刈り風景
中央/酪農をみざす女性に人気のレディースファームスクール看板(北海道新得町)

もくじ 写真

上/「にしかみ」業務部長上原明彦さん

中/レディースファーム修了後新得町で暮らす西森玲子さん、幸生ちゃん

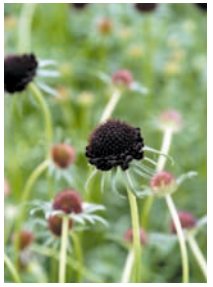
下/石動農産で働く岩本絢さん

アストランチアルピークラウド

エリンジウム

メコノプシス

ランキユラス



北の大地に 魅せられて

四季折々の大自然、広大な大地が魅力的な北海道。「新規就農しませんか」という道や市町村農業担い手育成センターの呼びかけに応じて、北海道で新たに農業を始める人はエターンの跡継ぎを含めて年間600人近くになり、最近では別の仕事からの参入者が増えている。花卉栽培で自立している人たちは、農業法人や牧場で働く若者たちを各地に訪ねた。

1 花の里・月形で〔花〕を咲かせる 花卉農家で独立（北海道^{つきがたちょう}月形町）



花の選別作業をする平尾さん



露地栽培の畑で宮下さん

月形町は古くから花の栽培が盛んで、道を代表する花の町として町ぐるみで取り組んでいる。新規就農する人には実習農場があり、終了すると町内で花卉農家として就農することができ、すでに9世帯を受入れ、6世帯が花卉農家として定住、現在3世帯が研修中だ。研修生一号の宮下さん、横浜の研究所を辞めてきた平尾さん一家を取材した。

月形町は（人口4349人）北海道空知支庁の南西部に位置する緑豊かな平坦地。石狩川の肥沃な大地は米づくりを中心に発展してきたが、花卉栽培の歴史も古く全道屈指の花卉生産地にもなっている。花栽培農家は105戸あり、作付け面積は約130haに達している。

町では「花の里・つきがた」として全国へアピール、町ぐるみで花卉と果実栽培に取り組みと共に、農業体験や温室の鉢花・花壇苗を直売する「つち工房」、宿泊研修施設「はな工房」、水と緑の自然公園「皆楽公園」などの施設や花に触れる事業に力を入れている。

役場産業課農政係の渡辺雪枝さんの案内で、新規就農して花卉栽培農家として自立している二組の農園を訪ねた。渡辺さんの家も農家で両親とご主人が水稲と花卉を作っている。一方、夏期はメロンやスイカがとびきり美味しく、店頭を賑わせている。月形は高級メロンの産地で、清涼感いっぱいの青肉「キングメルティー」と鮮やかなオレンジ色の「北の女王」があり、地元の人に人気の「北海カンロ」は懐かしい縞胡瓜のかたちをした甘味の爽やかなマクワウリである。

花を栽培しませんかと新規就農を呼びかける月形町のパンフレット



「岩の白扇」(菊)を主体に、花栽培に夢中

研究者から転職して10年目/宮下勇作さん

宮下勇作さん(37)の農園は比較的町の中心部にあり、1.48haの農地の中に26棟のハウスが建ち並んでいる。露地栽培の農場も広く、9月から11月に出荷するスカピオサを育成中だ。

「ここにいるのかな」と宮下さんの姿を探していたら、やがて奥のハウスの方からゆったりとやって来た。いまはランキンキュラスの出荷を終えたところで、ほんの少しだけホッと出来る時期のようで、奥さんの裕美子さん(36)は渥美半島の花弁農家へ勉強に出かけていて留守だった。

東京出身の宮下さんは宇都宮大学農学部卒業後、農水省の外郭団体、(財)日本植物調節剤研究協会に入社、茨城県牛久市にある同協会の農場で除草剤等の研究をしていた。妻の裕美子さんは大学の同窓生で、栃木県の実家は米と花をつくる農家だった。

ふたりとも農業の経験はなかったが、農業をしたいという夢を持ち、知識も豊富。広い土地が比較的安く手に入る北海道で農業をしたいと適地を探しているうちに、月形町の新

規就農者誘致条例を知った。

同条例は、農業者の減少を食い止めるために平成6年に制定したもので、町外の22歳から45歳までの既婚者、または18歳から60歳までの同居の親族がいる人を対象にしたもので、新規就農者には実習しながら農業技術を身につけてもらうため、3年間実習農場や住宅、倉庫などが無料で借りられる。農家にも研修に行き、町内で独立することが条件だ。実習に要する費用(種苗、肥培等)は実習生負担となるが、就農支援金が月一人15万円支給される。(これは土地や住宅と共に貸出制度の中から支給されるため、いずれは返還しなければならぬが…)

条例の適用第一号として宮下さんは平成6年春に一家3人で月形町へ移住してきた。2年間実習農場や花卉農家で学んだあと、役場の紹介で現在の農地とハウスを購入した。

「年取ってきて後継者がいないため営農を辞めたいという花卉農家があり、それをそのまま購入することが出来たのが幸いでした」

購入費の2000万円は、町とJAからの各500万円と国・道のL資金*を利用し、毎年返済している。

移住してきた時、生後10ヶ月だった長女の歩美ちゃんももう小学4年生。花卉栽培を始めてから生まれた農(みのる)君は小学1年生。二人は学童保育に行っているので帰宅は夕方になるそうで、残念ながら会えなかった。宮下さんの農園では奥さんの裕美子さんと二人三脚が欠かせないが、パートも2〜3人使っている。



宮下勇作さん一家(宮下さん提供)

宮下さんの栽培する花は、「岩の白扇」と呼ばれる白菊をメインに、デルフィニウム、スカピオサ、「ヒマラヤの青いケシ」と呼ばれるメコノプシス、ランキンキュラスなど。この二つの花は春用の出荷をほぼ終えたというが、ハウスではとるところでまだ美しい花を咲かせていた。遅れた草花も一生懸命花を咲かせていることに妙に感動する。

8月のお盆の頃出荷する予定の「岩の白扇」は、真っ直ぐに形よく伸びて、先端に花芽をつけている。この花芽を一つだけ残して摘む作業がこれから忙しくなるといふ。

宮下さんの農園には越冬用のハウスが5棟ある。

「この辺は豪雪地帯で冬には2〜3mも積雪します。そのために雪に強い頑丈なハウスを残してあとはビニールを外します。マイナス20度、ハウスは完全に雪に埋もれてしまいが、かえって暖かく感じます。ランキンキュラスの切り花や菊の苗づくりなど、冬も結構忙しいんです」と宮下さん。

花は月水金の週3日セリが開かれるが、そ

◀菊の花摘み作業が始まった



* L資金 北海道内において農業の生産基盤を持っていないが、今後新たに資本装備を行い本格的に農業を展開しようとする概ね40歳以下の認定農業者を対象とした融資制度。



ブルースプレーを手に、博子さん

北国の風を感じる草花びん 家族も増えて新居建築中／平尾元一さん

の前日に生産組合の出荷場に集められる。そのために出荷場に出す前の日の夕方までに畑から切り取り、選別してから水上げしておく。「月形町の花弁生産組合のいいところは、どんな花をどのように作り何時出してもいい」とで、他の農家も作っている花には一定の決まりを設けていますが、農家の自由が効くことです。うちの場合は7割を札幌、2割を東

京市場に出しています」

札幌の場合は近いので、買っている人の顔が見えるのが魅力的だという。

花卉以外の農作物栽培に興味がないか聞いたところ、「今は花にハマっています」という返事が返ってきた。

「花卉に限らず農業は、植物を育てる過程でいろいろと問題が生じてくる。それを解決す

石狩月形から札幌まで1時間30分のJR学園都市線が田園をのどかに走る新田地区の一角に平尾元一さん(40)の家と農園があった。かまぼこ屋根の家は一階が作業場、二階が住まいになっている。隣に住む家主さんが倉庫用に建てた家だそうで、平尾さんが買い取って全面的に改装して機能的で楽しい住まいに変えた。

ドアを開けると、爽やかな花の香りが溢れ、平尾さんが広いテーブルの上で収穫してきた花の選別作業をしている。私の知らない何やら素敵な花だ。花屋さんで良く見かける鮮やかな色彩の花に比べると、葉や小枝が茂った中に白やブルー、ピンクの可憐な花をつけた野草の雰囲気を持つ花たちである。

平尾さんは外国の花や植物の本・雑誌を見るのが好きで、気に入るとパンフレットを取り寄せてタネを注文するのだという。ヨーロッパの花には北海道の風土や気候に合うものがある。それを商品価値のある花として育成するのは大変だが、美しい人工的な花よりも、丈夫で、草原や風の匂いが感じられる草花をつくりたいと考えてきた。

るとまた別の問題が発生する。苦労も多いが、だからこそやる気が出るし、クリアしていくことで自分たちも良くなっていきます。花の場合は食物と違って、自分でこれだと思ったものを出せる、自由性が高いことがいいですね」と語る宮下さん。いかにも研究者らしく、様々なプロセスを研究し対応し、それを楽しんでいる様子である。



▲元輝ちゃんも誕生してやる気もいっぱいの平尾さん夫妻

家の線路を隔てたすぐ裏手に農園がある。奥さんの博子さん(35)が収穫作業をしていると聞いて行ったのであるが、何しろ大変広く、ハウスにも露地にもさまざまな花が育っている。そこへブルースプレーを収穫して両手いっぱい抱えた博子さんが現れた。濃紫色の清楚な花と博子さんの笑顔が良く似合う、印象深い出会いだっただ。

平尾農園は山林を入れて4町歩あり、花卉の農園として1・4町歩を耕作しているとい



▼平尾さんはパソコンでインターネット仲間と交流している。平尾さん手作りの“花の名刺”

う。ハウスが23棟、ハウスの間に広がる露地農園では、綿毛のような穂（花）をつけたエリンジウムが咲いている。ハウスでは、白い花びらを線香花火のようにつけたホワイトレースも咲き、ハウス全体が高原のようだ。他に、クリスマスローズ、デルフカサブランカ、色違いのスカピオサなど約30種の花弁を栽培しており、パートさんが常に2〜3人働いているとのこと。

「土地は山林があるのが気に入っています。地元の人に直接頼んで購入しました」

山は自然散策や観察を楽しめる癒しの場所。いずれ平尾さんのことから、活用するためのアイデアを考えるに違いない。

平尾元一さんと博子さんは大阪出身。元一さんは大阪大学工学部大学院を修了後、大手化学会社に就職。横浜の研究所で液晶ディスプレイの研究をしてきたが、「いつか自然豊かなところで暮らしたい」と思うようになった。博子さんは「定年後ね」と聞いていたが、言い出したら聞かない性格。だったら早い方がいいと、平成7年に北海道への移住を支援する企業グループの見学ツアーにふたりで参加、月形町の花弁生産農家や実習農場を見て移住を決意した。

平成8年4月に引越してきて町営住宅に住みながら、花卉栽培を学んだ。「生活費は全然心配しなかった。二人で月30万円の就農支援資金が出たうえに、早い時期から作った花を市場に出してお金になったんです」

平尾さんの花へのこだわりは、野生に近い状態で丈夫に栽培すること。栽培中からほとんど水や肥料を与えないという。

「一見した感じでは葉が茂り花も立派そうではないんですが、水上げするとパリッといきいきしてくる。買った人が、花の色が退化せずとも日持ちがいいとよく言ってくれます。

す。自然の条件に近付けて厳しく育てるようになっていますから」と平尾さんはいう。

博子さんは今年念願の赤ちゃんを出産した。元輝ちゃん（6ヶ月）という男の子で、大阪から博子さんのお母さんが来て、育児を手伝ってくれている。「5年前に病床にあっ

研修中の夫婦二組が 就農準備

宮下さん、平尾さんの取材を終えたあと、新規就農実習農場へ行った。

「皆さんは大変熱心で、花卉農家にとってもいい刺激になっています。忙しい時は2〜3人ずつパートを使っているので、地域の主婦たちにとっても大切な収入源です。成功の鍵は夫婦の協力ですね。最初は戸惑って移住してきた奥さんたちが今では嬉々として働き、地域の活動にも積極的に参加してくれています」と渡辺さんは言う。

募集の対象者を18歳以上60歳未満の同居の親族を有する健康な人、としているのも家族の協力が営農に欠かせないことが理解できる。「収入はサラリーマン時代に比べて大幅に減ったが、自分の力で稼ぎ、時間もやり繰りできる。何よりも家族と一緒に暮らせること、自然を相手に働くことの感動、充実感だ」と新規就農者たちは語っており、農業離れを止むなしとしてきた農家や地域の若者たちに一考を促す機会にもなっている。

実習農場は農地1万2000㎡の中に越冬ハウス2棟、簡易ハウス2棟、低温庫付農舎、トラクター等の機械や設備も完備しており、自由に使用できる。2世帯分の住宅もあり、現在本田さん夫妻、菅原さん夫妻

た父が亡くなりましたので、これからは一緒に住んでもらおうと思っているんです」と博子さん。

近くに予定していた新居の建築も9月から始まることになっており、ますます頑張る気がいっぱい夫婦である。

が入居し研修中だ。札幌市から今年研修に来た菅原さんに対して、埼玉県から来て3年目になる本田さんは実習期間を終えて花卉農家として独立する準備をしているが、まだ農地やハウスの確保が出来



ていない。渡辺さんに「まだですか」と聞いている。町内には休耕地や後継者のいない花卉・野菜農家があり、町やJAが優先的に斡旋することになっており、経営開始資金の貸付、奨励金、補助金などの支援制度もある。しかし農家は先祖の土地を手放すことへの躊躇、新規就農者への不安があり、借りる側にも希望の農地や住宅があるため、必ずしもスムーズにはいかないのだろう。

しかし平成6年に条例を制定し実習農場を整備して以来8世帯を受入れ、2世帯が実習中という実績を持つ月形町は、同様の制度を策定している市町村からも注目されている。今後は基幹産業である稲作に花卉メロン、スイカ等の栽培を組み合わせた複合経営を展開して、足腰が強く、若い人や後継者が夢を持てる農業の町にしたい。そのためにも新たな担い手たちに期待している。



▶ 新規就農者の実習農場研修中の本田、菅原さんと語る農政係渡辺さん（右）

月形町産業課農政係 ☎0126-53-2321

開設8年目を迎えたレディースファームスクール

第二のふるさと・新得で夢を育む レディースファームスクール修了生たちはいま

（北海道
新得町）



来修了生のその後が気になっていたが、3割が新得町に残って農業関係の仕事に従事し、3割が道内や実家などで農業を続けている。酪農家等と結婚して北の大地で新たな生活を育む女性も多く、そんな一人に取材することが出来た。

人々が優しく住みやすい町
新得に残って酪農として結婚
西森玲子さん

西森玲子さん（33）はレディースファームスクールの第5期生。平成12年度に山形県上山町から来て入学した。「サラリーマンの家でしたが、北海道に憧れ、農業にも関心がありました。ネットでレディースファームのことを知り応募。その年は13名が入学し、一人の落伍者もなく13名が卒業した年で、今でも皆と時々連絡を取っています」

卒業後は郷里に帰ることも考えたが、新規就農者を除いて酪農関係で従業員を採用するところがなく、新得町に残って働く決心をした。やがて酪農ヘルパーをしていた西森和幸さん（38）と知り合って結婚、酪農の仕事が続いてきたが、幸生ちゃん（1歳）を出産、いまは育児と家事に追われながら、新得町での生活を楽しんでいる。

「卒業しても新得町なら農業の仕事は幾らでもある。住民は少しお節介だけれど、とても

優しく親切で、住みやすい町です。子供のびのび育てる環境としても最高です」と玲子さんは言う。連れてきたはずの幸生ちゃんは何と見ると、ファームの管理人さんに抱かれて楽しそうに遊んでいる。赤ちゃんを連れて母校へ時々出かけてくるそうで、OBが気軽に立ち寄って、新入生や同期生と交流する場にもなっているようだ。

ご主人の和幸さんは、酪農家ら4戸が大規模法人化して共同経営する（有）友夢牧場の役員として勤務しており、一層多忙な毎日を送っている。「とはいっても同じ町なので、

スクールを卒業して新得町に残った西森玲子さん
愛娘幸生(ゆき)ちゃんはスクールの人気者だ

女性だけの農業体験実習施設「新得町レディースファームスクール」が開校して8年、毎年10名から13名の研修生が一年間、酪農家や畑作農家で実習を受けて卒業していった。修了生たちはその後も酪農や農業に携わっているのだろうか。都市でのOL生活を辞めて、凍てつく冬の早朝の牛舎で笑顔で牛の搾乳を手伝っていた研修生たち。感動と希望を与えてくれた取材だった（「ではら」12号）。以



家へ帰れば子供の相手もよくしてくれます」と玲子さん。町内の町営住宅に住んでいる。

レディースファーム修了生の動向等について、新得町役場農林課農政係長の佐藤博行さんが資料にまとめて、休日の中を同ファームへ届けてくれた。レディースファームスクールの研修生を出身地別に見ると、トップが東京都の13名、大阪府の12名で、次いで神奈川県、静岡県、千葉県、兵庫県となっている。最初の数年間は地元北海道の参加者は少なかったが、最近は道内からの応募もすこしずつ増えてきた。都市の女性の自然や農への関心の高さが、農業を敬遠してきた田舎の人に一石を投じる機会になってきているのかもしれない。

スクールを修了した女性たちのその後の動向を見ると、7期生までの修了生66名のうち農業従事者が39名、結婚した人が22名で、25名が新得町に残っている。道内で農業に就いている女性は20名、既婚者は10名、その他が県外（実家等）で農業に就いたり結婚している。

施設は平成8年の開校した年の秋に訪ねて以来だが、よく手入れされて当時のまま。変わったところは一階ロビーの壁に研修生たちの写真が沢山貼られていることだろう。7期生66名が修了していった証である。

早朝の搾乳のあと昼頃スクールに戻り午前中の作業と昼食を終えた研修生は、2階の各個室でしばらく休憩タイム。静かでのどかな一階の和室で西森さんと佐藤係長からお話を伺った。ここは隣の大会議室と共に研修や、酪農家との打合せ、交流活動に使われている。研修生は3カ月ごとに実習農家が変わるので、酪農家の人達が来て打合せをする場所にもなっている。

酪農の担い手が頑張っている町 スクール効果は大きい

新得町（人口7449人）は、町としては全国で4番目の面積を持ち、西は日高山脈、西は大雪山国立公園、東南部には日本の食料基地・十勝平野が広がる畑作と酪農が盛んな町。レディースファームは町立の研修施設として平成8年に総事業費約3億5千万円を投じて建設。長期研修生にはバス・トイレ付の個室が与えられ、農産物の加工実習室などでアイスクリームやチーズ等の加工も勉強できる。酪農の研修の他に畑作を学ぶこともでき、実習農場では自分の作物を栽培することもできる。

実習生の支払う経費は、個室の管理費、教材費、食費等で月4万円ほどかかるが、農家の作業を手伝うことで酪農家が月平均7万5千円、畑作農家の場合は7万円を実習生に支払うので、生徒たちは特別のことがない限り食べていける。

これについて佐藤さんは、「一人のファーム研修生を受け入れるのに農家は90万円ほどかかりますので、そのために牛を7〜8頭増やさなければならぬ。搾乳しやすいよう設備や安全衛生面にも気を使います。そういうところが運営の向上や経営の拡大に繋がるんですね。生乳の生産量を見ると、北海道全体では3%の伸びですが、新得町では13%の伸びで、全道のトップクラスです。スクールの開校当時と比べると、乳量が1.5倍に伸びていて、牛の頭数も相当数増えています。

これは担い手がしっかりいて、経営内容が良くなっているからで、レディースファーム効果といえます。若い女性たちの働く様子や牛が大好きになっていく様子を見て、自分た



ご主人の西森和幸さん。大規模牛舎「友夢牧場」で多忙な毎日を送っている。フリーストール飼育の牛舎で

ちの仕事を見直し、頑張ろうという気持ちになるんですね」と語る。

町からいただいたパンフレットの中に、新得町に残って酪農関係の仕事をしているスクール卒業生の言葉が載っている。「牛のとりこになった私は、牛にふり回されながらも楽しい毎日を送っています」「一度は実家に戻りましたが、牛に携わる仕事がしたくて新得に戻り、大好きな牛たちと充実した毎日です」「ここで出会ったのは、すばらしい景色、かわいい動物たち、自然の中で暮らす素敵な人々、仲間たち。たくさん宝物に囲まれています」等々。

「私の同期生のなかにも、卒業して帰郷するといって飛行機に乗ったけれど、「しまった」と思って空港からすぐ引き返してきた人がい



ます。ここはもう私たちの大切なふるさとなんです。

私の知る範囲では町や周辺町村で結婚しているファーム卒業生が9人います。酪農家へ嫁いだ人は4人で、あとは畑作農家の人や役場職員と結婚しています」と玲子さんは言う。

「ご主人の和幸さんの実家は浦幌町の酪農家。両親二人で長年やってきたが、年取ってから働くのはきついと、今年酪農を辞めた。玲子さんは「実家へ戻って継いだら」と勧め、自分も手伝う覚悟だったが、近代的な酪農経

営の旗手として働いている和幸さんには実家で一からやり直すのはきつい、新得町を家族の新ふるさとにしたいと両親の了解を得た。町にはレディースファームスクールを見学したいという視察者が全国からひっきりなしに押し寄せるという。同じような学校を設立したいという町村もあるようだが、同校は町と農家の長年にわたる連携と住民たちの理解、そして新得町ならではの自然や風土があってこそ成功したといえる。農業や動物が好きな女性たちはまず新得町に来て学び、ここから全国へ発信していく、その拠点になってほしい。そして私も含めて「農業をする女性」を珍しがって取材したがる風潮がなくなり、農業青年が増えて地域が豊かになる、そんなことが当たり前の世の中になってほしいと願

わずにはられない。

600頭をフリーストール飼育 大規模共同牛舎「友夢牧場」

レディースファームスクールからほど近い場所に、昨年近代的な共同牛舎(有)友夢牧場が完成した。平成12年に法人化を図って営農してきた酪農家3戸、畑作農家1戸が個々の農場を切り上げて施設を集約したもので、600頭8群管理のフリーストール牛舎、26頭のダブルバラレル搾乳方式ミルクングパーラー、混合飼料給与で効率的な低コストの共同経営をめざしている。

上佐幌地帯の最北部にあり、この地区は殆どが酪農家で、町営育成牧場にも近い。近代的な大規模牛舎群を持ち搾乳等をするフリーストール牛舎は7036㎡という広さ。牛たちはいくつかの柵に区切られた中で、繋がれることなく自由に餌を食べたり動きまわったり休んだりしている。

案内をお願いしたのは西森和幸さん。「餌を自由にたっぷり食べられるので乳量が増え、一日3回の搾乳が可能になっています。牛たちのストレスも減り運動もするので健康的になっていますね。牛舎の管理も効率よくなりましたが、朝・夜に加えて午後にも搾乳するので、その分忙しくなりました」と西森さんは言う。

友夢牧場の一員である畑作農家では主として飼料作物を栽培しているが、良質な飼料を安定的に確保するため、糞尿を堆肥に還元して作物育成に使うための堆肥舎も新たに設置、他の耕種農家へも提供していく。パンカローサイロも8舎あり、何しろ広い。

「いまは3回搾乳することによる乳房炎への影響や回数が増えたことで個々の牛に影響が



あるかを観察しているところですが、共同化のモデルとしてぜひ成功させ、ここで子供たちが乳しぼりやアイスクリームづくり等を体験できる場所にもしたいと思っています」

職員は役員が西森さんを含めて6人、社員5人、従業員・研修生やパートを入れると17人が従事している。社員の中にはレディースファームを卒業してここで働く女性の姿もあった。

奥さんと幸生ちゃんのこと話していくと、「男の子のようですよ。たくましく育つと思います」と顔がほころぶ。

朝の搾乳は5時から8時、昼は12時30分から3時、夜は8時頃終了する。交代制だが立ち会っていることが多いので、搾乳を終えてから家に帰って食事、また出社するという。回数が増えて「育児を手伝う時間が少なくなりましたが、彼女は牛のことをよく知っていますから理解してくれます」と言っていた。

・新得町役場農林課
☎01566(4)0522

文/浅井登美子 カメラ/小林恵

7000㎡の牛舎をはじめ搾乳舎、待機場、ハンガーサイロ8室、堆肥舎等が建つ。搾乳舎の前で

3 北の大地に魅せられて

馬鈴薯、小麦、ビート、そば、豆類等の北海道を代表する作物を大々的に育て、ハウスでは真夏に食べられるイチゴ、そして山羊や羊が遊ぶ農園の入口には、レストラン&農産物・加工品を販売する交流施設等を有する観光農園「にしかみ」。上幌内集落の農家が協力して設立した農事組合法人・西上経営組合の農場である。地域農家の研修場・加工場として設置した諸施設や技術は、後に観光農園に発展し、観光客にとっては農業とふれあうオアシス、農業をめざす若者や地元の主婦たちにとっては貴重な雇用の場になっている。



集落が丸ごと“美味しい農場” 観光農園「にしかみ」(北海道鹿追町)

集落の厳しい農業環境を

打破するために

「西上経営組合」を設立

西上ファームのある上幌内地区は新得町から鹿追町に至るなだらかな丘陵をよく手入れした美しい農業大地で、その中央部に観光農園「にしかみ」のレストランや農産物加工施設などがある。経営面積は365haというから、その広さは「集落丸ごと」と想像するのがわかりやすいかもしれない。(うち組合員所有は233ha)

ここでは馬鈴薯約53ha、小麦79ha、ビート40haをはじめ、そば、豆類、アスパラ、イチ

ゴ等を作っている。

朝9時に農園へ出かけていくと、農園脇ではトラクターが草刈りの最中、観光農園では農園を借りているオーナーに代わってファームの人達が草むしり等の手入れ、そして30棟もあると思われるイチゴハウスでは、赤く熟したイチゴの収穫作業をする女性たちが忙しそう。山羊や羊たちも小屋から出して広い草原へ放してもらうなど、柔らかな初夏の陽ざしの中で人も自然も輝いて活気に満ちている。

従業員は、この季節はパートの女性など入れて50名を越えているそうで、7時30分に全員集合してその日の作業を打合せし、以降はそれぞれが現場へ行って作業を開始する。

広いロッジ風のレストランでまず牛乳とコ

◀上から、農園周辺の草刈り作業
小屋から出されて牧草地上で遊ぶ羊たち
西上ファームのレストラン&農産物・加工品販売所
左はそば打ち体験等が出来る研修棟

- ▶ 美しく作付けされているそば畑。秋には鹿追そばが出る
- ▼ 社会に還元出来る農業をと語る高橋俊一組合長



「ヒーをいただく。
高橋俊一組合長が事務所から我々の待つレストランに駆けつけてくれた。これだけの広

い場所、事務所からは車で約10分はかかる。「西上ファームは、もともと西上と呼ばれた地区の農家が、経営赤字による離農や若者の農業離れ、休耕地の増加を何とかしなくてはと、昭和50年に共同化による事業を開始したのが始まりなんです。その時は原種の馬鈴薯、飼料（牧草）栽培でしたが、翌51年に法人化し西上経営組合を設立。以降はそば、小麦、キャベツなど高地に相応しい作物を大規模栽培し、機械も施設も効率よく使うことで生産性を高めてきました。農業法人化の先駆けとしても各地から注目されました」と高橋組合長は語る。

標高360mという冷涼な気候で、日高山脈から吹き降ろす風は冷たく、土壌は湿性火山灰土と自然条件も厳しいが、それだけにとびきり美味しいそばや馬鈴薯が作れて、原種の馬鈴薯・イチゴ苗栽培もここだから可能だという。

高橋組合長は組合長になって14年目、有限会社鹿追そばの取締役会長も兼ねている。

「組合が運営していますので、一期3年で役員や社員を全員一致で選出しています。いま役員は2名、職員が2名、各部門の責任者として働くチーフが6名で、あとは契約臨時職員が30〜40名います。私は現場で働くことが何よりも好きな人間で、出来るだけ現場に出ています。現場を知らない若い人の指導も出来ませんからね」

農業をしたいと来る人が多いのだが、「なぜ農業をしたのかと聞くと、自給自足的な生活がしたいからと応える人が多く、そんな人に限ってピカピカのクルマに乗ってくる。言葉やイメージで農を捉えている人が増えています。その点、若い女性たちの方がやる気があります。よく働いてくれます。このファームでも都市から来て働いていて農場の若者と結

婚、いま育児のために家庭に入っている女性が多いです」と高橋組合長。

西上経営組合の平成15年度の売上は約3.2億円で、馬鈴薯（8276万円）、小麦（6763万円）の比重が高いが、生食用イチゴやそばの生産加工なども年々伸びている。町の西町に工場を持つ「鹿追そば」は美味しい蕎麦処としても賑わっているが、その経営も同組合が出資した別会社。石臼挽きのそば粉、農園が育てたそばや小麦を使って打ったそば、うどんの乾麺は、今では鹿追町の特産品として全国へ届けられている。

「我々農家はこだわって作っているとはいませんが、美味しいかどうかは買う人が判断すること。それを常に考えて安全で美味しいものをつくる、それを従業員たちにもよく言います」と組合長は、昨今の言葉やイメージが先行している有機野菜等に苦慮しながら、西上農園の「こだわり」を追求し続ける。

「今まで日本の農家は保護されるのに慣れ、不振も他人のせいにしてきました。それでは輸入品や海外の農家に太刀打ちできない。企業として経営し、社員にもしっかりと給与を払い、儲けて税金もしっかり払って社会に還元していかないと発展していきません」と語った。

北の大地で学んだことを 故郷で生かしたい

新規就農の研修生として働いている何人かに話を聞いた。

組合設立と同時に来て、若い人の指導に当たっている業務部長上原明彦さん（38）。富良野市の農家の次男坊で、組合員である叔父に頼まれて高校卒業と同時にやって来た。「20年前に月15万円給料を出すからと言われ

北の大地に魅せられて

て来ました。当時、農業を手伝ってそんなにくれる農場はなかったのでびっくり。その分、月2日休むだけでよく働きました。特に新しい農業機械が次々登場するので、機械に強くなりましたね。今は二代目達が育ってきたので、彼らが経営者として運営できるまでの繋ぎとして頑張りたいと思います」

富良野の実家はその後、親も兄弟も鹿追町に魅せられて移住し、「にしかみ」で働いている。

イチゴハウスで施設内の空調や機器の点検をしている三島淳一さん(36)は若手県陸前高田市の出身で、西上ファームで6年目になる。

「公務員をしていましたが、農業をやりたいと女房と北海道へ来て、3年間ほど古い農家に住み、六郷の森(富良野市)で働いていました。そばづくりに興味があり、西上ファームに入りました。ただしここは一部を除いて12月から翌2月まで働く時間も少なく、イチゴも11月で出荷が終了です。そのために時給月給制のいわば臨時職員なので、若手へ帰ってそば栽培を始めたいと思っています。北海道はみな人が良く、面倒見が良く、自然も魅力的なので、つい居てしまう。そのために、決して北海道に負けないぞ、若手はもっというぞ」と自分に言い聞かせているところ。そばという三島さん。そば栽培をし手打ちそばを食する店が出来る日はいつか、便りを期待したい。

農園でレストランを手伝ったり、手打ちそばの加工や体験教室の係をしているのは加藤一美さん(31)。旭川の出身で、稲作と野菜作りを本格的に身につけたいとファームに勤めた。3年目になり、農場での仕事は食材関係や観光農園の実務だが、個人で園内の一隅を借りて野菜を栽培している。



「頭で考えていたものと実際とは随分違うんです。雨が降ると葉ものが伸びる、植物はデリケートだなと感じします。トレーラー型の町営住宅が家賃9200円。冬は牛豚の腸を買ってきてソーセージを造ったり切りばし大根を造ったりと、結構楽しくやっています」とにこやかに語った。

3人とも話が楽しく、とても魅力的だ。自然と共生して暮らしていると心身共に豊かにおおらかになり、人にもやさしくなれるのだろうか。北海道で出会った人は皆がとてもいい哲学者の顔をしていた。そして粹で恰好良かった。

・西上経営組合 & 観光農園にしかみ
☎01566(6)1515
文/浅井登美子 カメラ/小林 恵



上/観光農園にしかみのキカイ博士、業務部長・上原明彦さん
下/北海道の魅力を断って故郷へ帰らねばと語る三島淳一さん
▶農業大好き、野菜や加工品作りも試みている加藤一美さん

隣家との垣がないのが特色の蛭水団地。
手入れされた芝生の庭で子供たちと



7年間超多忙を極めたレストランチェーンの店長を辞めて、田舎暮らしを決意した山川さん。「都市に近い場所」で「野菜づくり」と漠然と考えて大江町に来たが、皆が何かと世話をしたり手伝ってくれて、トマトハウス43aを栽培し、分譲住宅に理想のマイホームを建築した。家族4人各々が地域活動にも積極的に参加して「田舎暮らし」をエンジョイしている。

●ムラ人の期待と笑顔に支えられて①

大江町（山形県）で「都会的田舎暮らし」

仲間の協力でトマト栽培も順調／山川正信さん

転勤、日曜日なしの店長生活に

「今の仕事を続けたいの？」と妻

朝日山系を源流とする月布川が最上川と合流する村上平野の西端、大江町（人口1万353人）左沢地区。脱サラして新規就農で7年目になる山川正信さん（39）は、43aのハウスでトマトを専業栽培している。妻のみゆきさんと大志君（小学5年生）、航君（3年生）の4人家族で、分譲地に念願の家も新築した。

正信さんは鎌倉市出身。大学卒業後レストランチェーンに就職、漠然と料理に関わる仕事があったので、調理師の免許も取ったが、入社3年目で店長をまかされ、神奈川・東京・宇都宮と転勤、朝早くから夜中までの変則勤務、日曜日も休めず、家族との時間が取れない生活が続いていた。

30歳を過ぎ仕事も生活もこのままでいいのだろうかと考えることが多くなっていった頃、また転勤の話が出た時、妻のみゆきさんが「今の仕事ずっと続けたいの？」と聞いた。その頃次男がアトピー性アレルギーで医者巡りをしていった時期でもあった。

もともと自分は都市生活志向者でなく自然志向だったのではと山川さんは子どもの頃を思い返した。ボケッと、ただ空や海を見て「大きな自然」が好きだった。中学生の頃からおじさんによくスキーに連れていってもらい、ゲレンデの青空にいつも心を和ませ

た記憶があった。就職先にレストランを選んだのも大学時代のアルバイトがスキー宿の料理人だったからだ。しかし農業への関心はなく、野菜を仕入れに市場に行った時、料理も好きだが食物を生産するの面白いなと思う程度だった。

しばらくして次男のアトピーは治まったが食物アレルギーが残った。アトピーを癒すため田舎に移り住む、そんな記事が気になりだしたのもこの頃だった。職種でなく生き方で仕事を選んでみたいとまじめに考え始めた。

この町のこの分譲地に住みたい

大きな決心の節目になったのは、世の中の職種と給与の関係はどのようになっていのか求人誌に目を通したとき、巻末に『全国新規就農センター』の広告が目にとまったことだった。さっそく問い合わせたら「どのような農業をやりたいのですか？」と問われた。

有機農業は生産性が悪く仕事が大変、生活が苦しい。また、稲作は耕作面積が広く大変。と断片的な知識が脳裏を駆け巡る。とりあえず『野菜づくり』、場所は母から聞いていた祖母の疎開先の話に出てきた『寒河江市周辺』と答えた。

紹介された役場とJAの職員が「大江町はバナナとみかん以外は何でも出来る」と野菜農家を案内してくれた。トマト農家を訪ねたとき「これだ」と思った。紹介された菊池良浩さん（トマト倶楽部会長）の人柄がそう思

豊かな果樹畑の向こうにトマトハウスを望む
（奥中央が山川さんのハウス）



わせた。

山川さん夫婦の移住地のイメージは「田舎暮らしの都会的な生活」だった。大江町は県庁所在地に近く、医療、買い物にも申し分ない、良質の水にも恵まれている。みゆきさんはいろいろな場所を見てきたが、この町の空気にふれたときここだと予感し、そして造成中の分譲地を案内されたとき「ここに住みたい」と思ったという。

役場が貸家を探してくれて、移り住んだのは1996年8月。当時2軒のトマト栽培農家の菊池さんと高取さんが全面的に面倒をみてくれ土地探しもしてくれたが、休耕地があってもなかなか貸してもらえなかった。

農地が見つからないまま半年が過ぎた頃、栽培者が亡くなったユリ栽培を引き継いでみないかという話になった。ユリ農家の指導を受けながら何とか出荷を向えたが、農業一年生には散々な結果だった。初めての農作業はいい勉強になったが、やはりトマト栽培をやりたい一心に準備を進めていたら、休耕地を借りられることになった。

ぶつつけ本番トマトハウス栽培を始める正信さんに生産者仲間がハウス造りから手伝ってくれ、15a(500坪)のパイプハウスが完成した。高取さんと菊池さんの指導により、初めての収穫(前期)はまずまずの出来で、先輩のトマトと一緒に首都圏の生協に出荷された。後期は夏バテで身体も収量もダウン、自らの農業者の体力の無さを感じた。3年目には収量、質ともに満足の結果だったが、農業は天候や諸々の条件で左右されるリスクの多いことを日々学んだ。

トマト農家9人が

「エコファーマー」認定

山川さんの所属する大江営農生活センター

「トマト倶楽部」は、環境と調和のとれた農業を推進するため、土づくり、減農薬、減化学肥料栽培に取り組み農業を推進する「エコファーマー」の認定を受けている。会員は現在9人、エーターン者や新規参入の若者も頑張っており、主として生協に販売している。マルハナバチで受粉をし、もみ殻堆肥を使用した土づくり、微生物を活用した病害虫駆除にも取り組んでいる。また年に一度、産地を訪ねてくる消費者を圃場に案内したり、生協のイベントに招かれて講師をしたり、首都圏に出かけて消費者の声を聞いたり、交流にも努めている。

7年目に入った正信さんは、隣の農地も借りて43a(1300坪)のハウスに増床、夏秋トマト生食用・調理用を栽培している。苗づくりの準備が2月から始まり、出荷は7月から11月までが繁忙期。冬場は土づくりやハウスのメンテナンスで仕事も農閑期になるので、今年にはハウスの裏作でもみ殻を利用した冬出荷のアスパラ栽培を始める予定だ。

子どもが大きくなったので3年前に町内の分譲地に新しく家建て、小さな作業場も作った。みゆきさんもハウスを手伝い、多忙期にはPTA仲間のお母さんに応援してもらったり、ハウスは交流の場にもなっている。

垣根のない芝生の庭で「今、いいよ! 朝も夜も毎日家族で食事が出来るし、果物が旨い、ニラは甘い、ピーマンは苦くない、トマトの季節は自家製のトマトを毎日たくさん食べるよ」と正信さんが顔をほころばせる。

農業者は自営業だから忙しくても時間の調整が出来るので、トマト倶楽部の「トマト通信」を編集したり、PTAの役員を勤めたりと、地域活動にもかかわる余裕が出てきた。今年から土曜日は子どもが所属するスポーツ少年団サッカーのコーチもしている。

自分たちを受け入れてくれた大江町に感謝しながら、大江町の豊かな自然の中で家族との時間をたっぷり共有できることに満足している山川さん夫妻である。

・山形県村山総合支庁産業
経済部 西山農業普及課
☎0237(86)8111
文・カメラ/小林 恵



東京育ちのみゆきさんは正信さんから田舎で農業をやりたいと打ち明けられたとき「エーツ農業」と一瞬驚いたが、それもいいかなと思った。
トマトハウスで山川さん夫妻

花から花へマルハナバチが飛び交う

▶キャベツ畑で、従業員・研修生の皆さん



食べていける農業経営を実現し、都会の若者たちが農業に夢を抱いて研修にやってくる。佐賀県神埼郡東脊振村の(有)石動農産は、農業従事者が減少を続ける現実を逆手にとりて作付面積を増やした。既成の流通ルートに頼らず営業マンを置いて、生産から流通まで一貫して管理することで、農業に展望を開いた農業法人の試みをレポートする。



脊振山系のすそ野がすぐそこまで押し寄せられている佐賀平野の北東部。雲が低く立ち込めた小雨模様の午前中、(有)石動農産の従業員3人と研修生4人、それに近所の農家から手伝いに来ているパートの男性が、大型トラックを農道に横付けし、キャベツの収穫を行っている。

丸顔で幼さの残る清水雄三さん(21)は、大阪農大の新卒で、2ヶ月前に研修生として石動農産に入った。高校2年生の時「将来は自然の中で働く仕事をしたい」と考え始めたが、大阪ではそれは望めない。両親は会社勤

めなので、自分で道を切り開くと考えていた時、ファーマーズフェアで石動農産の秋吉義孝社長(48)と出会ったのだ。

「夢は、有機農業と減農薬でイチゴを作ること。1000万円を超える収益をあげられたいな」

赤い綿シャツに帽子を被った岩本絢さん(22)は新潟県の出身、少年のようだ。彼女も、今年4月から研修生として入ったばかり。大学では人文科学部で宗教、民俗学を専攻していたが、大学が環境問題に力を入れていたので環境学部の授業を受けているうちに「地球を救うのは農業だ」と思うようになった。彼女も希望は、「完全有機でイチゴをやりたい」

農業に夢を抱く若者が秋吉社長に出会った

●ムラ人の期待と笑顔に支えられて②

若者が農業で食べていけるムラに企業化して流通まで一貫(有)石動農産(佐賀県東脊振村)

◀上/雨の前に大忙しでキャベツの収穫作業
中/雨の中、草刈り機の点検をする清水雄三さん
下/「石動米」の水田と畦の草刈りをする岩本絢さん



岩本さんも農業の経験はまったくなかったが、3ヶ月間の農業体験には満足そうだった。「外で体を動かしていればすっきりするし、分からないといけないことがたくさんあるから、楽しいです」

彼女は、石動農産が寮として借りている近所の民家に住んでいる。

「食べ物会社から持って帰るし、制服もある。家賃も会社持ちだから、ほとんどお金は要らない生活です。今のところ、私の作物でものになりそうなのは、カボチャとニンジンくらいですね。でも、こんな美味しいカボチャは食べたことがない、というくらい美味しいですよ」

3つの組織が連動して 新規就農者を支援

研修生制度は、佐賀県と東脊振村の農業委員会と産業課、それに石動農産の3つの組織がうまく連動して可能となった。

研修生は、2年間、石動農産で無償研修を行う。その間の衣食住は、会社が全て負担すると共に、研修期間が終われば、東脊振村で農家として独立できるチャンスを与える。研修期間中でも、まったくの無収入では生活が

難しい。その間の経済面を支えるのが、佐賀県の新規就農支援制度である。毎月15万円の融資を受けることができるのだ。この融資制度には、5年間就農したら借入れの半額が免除になる特典も付いている。かなり恵まれた条件と言えるだろう。

しかし、新規に農業を始めようとする若者は、もう一つ難しい問題を抱えている。肝心の農地が手に入らないのだ。既存の農家が農業を止めるにしても、知らない都会の若者に田畑を売り渡すことはまずないからである。その最も難しい田畑の入手を、石動農産と東脊振村が地元の強みを生かして世話しようというのである。そのためには、東脊振村の村民となって、農業をすることが求められている。

「独立させてもらえるのだから、中間管理職になるよりは良い。ここに一生暮らしていくつもり」

岩本さんは、ここで村民として暮らすのは当然と考えている。

福岡県出身の鳥飼真弓さん(26)は、研修生の中では古株。すでに1年2ヶ月が過ぎた。大学では農業を勉強していたし、職業にしたいと希望を持ちながら、それまで農業のできる所が見つからなかった。

「米作りができる所を探していました。県庁やハローワークへも行ったら、インターネットも調べてみたけど、希望をかなえる所はなくて。仕方なくフリーターをしていた時、ファミリーズフェアで秋吉社長に出会った。米づくりで従業員を食わせていることに感動して、この人とならうまくやっていける」と。米農家は、経済的に難しいから現実的ではないかも知れないけど、手探りで実現できる方法を見つけていこうかな」

キャベツの収穫は、昼前で切り上げた。雨



▲ 大学で農業を学び、石動農産で研修する鳥飼真弓さん
◀ 石動農産の社屋

が強くなってきたからだ。収穫の終わったキャベツを大型トラックに積み込むと、一斉に食堂へ向かった。従業員は弁当。研修生は、誰が作ったのか肉ジャガをご飯にのせて食べていた。社員食堂というよりは、共同生活の食堂といった和気あいあいとした雰囲気だ。

農業離れを逆手にとり 企業化すること

有限会社石動農産の創業は平成6年。秋吉社長は、個人の農業では展望が開けないから会社にしたと言った。

「個人で農業をやると6haが限度なんです、耕作面積として。米だと1aで20万円位。つまり1200万円の収入では最高所得は600万円が限界。600万円の男でしかない訳です。自分をもっと大きくなすためには会社しかなかった」

会社にする良さは、規模拡大のメリットである。個人ならば6haが限度でも会社ならば50haが可能。1億円の収入になるのだ。同じ機械を使っても規模が小さければ減価償却費が20%も占めるけれど、規模の拡大をすれば10%以下に押さえることが可能になる。

従業員の確保も会社の方がしやすい。個人





古い歴史を持ち味が良いと評判の「石動米」

では農業をしないが、給料をもらってだったらやっても良いと思う人は沢山いる。

石動農産の従業員は、役員を含めて11人。その他に研修生が5人いる。

「運が良かった」と、秋吉社長。農業では食

べていくのが大変な時代であることが幸いしたというのだ。親が子どもに農業をさせなくなった。きつい労働をしても収益性がない農業よりは、いくらかの給料をもらった方が良く、この20年間、若者の農業離れが続いた。「気が付いたら、私より若い農業従事者が3人しかいない。どうすりゃえんじやと、いうことです」

秋吉社長は、22年前に専業農家として耕作面積1・5haから始めた。それ以後は、やめていく農家から田んぼを預かって増やし、現在は50haになっっている。この間の東脊振村における産業別就業者数の変化と人口の推移をみると、昭和55年から平成7年までの15年間で、農業就業者数は662人から333人に半減しているのにも関わらず、人口は5626人から6053人に増えている。村は、人口流出をくい止める対策として、村営住宅を建設すると共に佐賀東部中核工業団地を造った。福岡市へは電車で1時間余、通勤圏である。つまり、きつい労働をしても収益性の悪い農業をするよりは、安定して食べていける勤務先が身近に準備されている村なのである。

石動農産は、農業離れの時代背景を逆手にとって、農業を企業化することに成功した。

直販・情報提供をきめ細かく

もう一つ、石動農産の企業化を支えた要因は営業マンを置いたことだ。

生産した米の50%をスーパーマーケットとデパートへ卸す。残りの50%は施設や病院、食堂へ業務用として直販する。米の営業を専従でしているのが、大手食品会社から秋吉社長に引き抜かれてきた石田新一朗さん(35)である。

「入社した平成10年当時は、百姓の集まりのようなものでした。3年間で、売り上げを2倍にすることができた。自分で育てたものを自分で販売するのが商売の基本ですから。商品への愛着が違います」

石動農産の主力商品は、「石動米^{いしどうまい}」である。東脊振村の石動地区は、江戸時代から鍋島藩への献上米を産出する米所として知られていた。脊振山系のすそ野で水が冷たい。米粒は小さく、10a当たりの収量は玄米で8俵と少ないが、味が良いのである。

近所のスーパーだけで販売していた「石動米」を、佐賀市内、鳥栖市内、神埼郡のスーパーにも入れてもらうことに成功した。福岡市内まで販路を拡げたいが、まだ手が回らないのが実情だ。米の美味しいのは精米して一ヶ月以内。「石動米」を置いてくれるスーパーを廻り、精米してから期間の経っているものは自分で交換してくる。「営業は人間関係ですから」と、石田さんは、宣伝用チラシ「石動農産だより」を作る。「稲がこまめで育ちました」とか、「もうすぐ収穫ですよ」など、愛着を持ってもらう情報と有機肥料、低農薬栽培など信頼につながる情報を年4、5回、お客さんへ直接伝えている。

午後からは、畦の草刈りとなった。鳥飼さんの草刈り機は調子が悪い。雨足はだんだん



大手食品会社から転職、熱心な営業活動で売上げを2倍にした石田新一朗さん

激しくなってくる。カッパを着ての作業は煩わしいのか、彼女は、フードを外して草刈り機と格闘している。20分間ほどしてようやくエンジンが掛かった。草刈り機のエンジン音が、小型飛行機の編隊が飛んでいるように脊振山のすそ野に響いた。

わずか2年間の研修で、農業がやっていけないものだろうか。「まわりの農家が皆、先生ですから。同じにすれば良いですから」と、秋吉社長は心配していない。

「かろつじて車に乗れば良い。トラクターも乗れない。何をやってよいのかもわからない。そこから始めて、ちゃんと独立できるようにしますから」

そんな彼の自信が、研修生には信頼となっているようだ。

農業に夢を抱く若者を研修生として受け入れ、独立の手助けをする。会社にとっては、労働力の確保と地元自治体との連携がメリットとなっている。その上で、地域と親密な関係を保つ農業法人の試みは、農業経営の新しい方向を示していると期待は大きい。

文・カメラ/芥川 仁

・(有)石動農産 ☎0952(53)5259
 ・東脊振村企画課 ☎0952(52)5111

●ムラ人の期待と笑顔を支えられて③

豊島(香川県 土庄町)へ帰ってレモン栽培

岡本満さん



瀬戸内海の美しい島が産業廃棄物の不法投棄で、「ゴミの島」という汚名を背負って28年。住民の長い運動でこの秋からゴミは島外に運ばれて処理される。島内にも海にも美しい自然が戻ってきている。海も島も再び美しさを取り戻す日も近い。果実の島として甦ろうとしている。

豊島(人口1400人)瀬戸内海国立公園に属し小豆島の西に浮かぶ緑豊かな島だ。過疎化のなかにあって漁業、稲作、石材加工などで細々暮らす島に、2000年から島の活性化にハウスイチゴ栽培を数軒の農家が始めた。"てしま"ブランドでの贈答や大阪のデパートに出荷され評判は上々、イチゴ栽培は若者の就業の場にもなっている。

同じ頃大阪のスーパー業界に長年勤めていた岡本満さん(54)は早期退職して、豊島にUターンした。流通の経験から、レモンなら商品としてまた加工品としてもやっていけると考えて3年かけて2000本の苗を植えてきた。収入のために土木作業の仲間をしながら荒れた山のような土地を何箇所も借りて整備、3haを豊かな耕地にした。

農業経験のない岡本さんを京都の種苗会社がレモン産地の瀬戸田町(広島県)の農家に案内して勉強の機会を回ってくれた。

農業をしたいと思い始めたのは27歳のとき瀕死の大病をしたときだった。地に足の着いた確かな生活をしたい、仕事は農業だと思った。和歌山、九州など農業をする場所を探したが、たどり着いたのは、過疎化で高齢化・若者の減少、耕作放棄の田畑が目立つ故郷だった。島は流通には条件が悪いが、今までの経験をいかせば可能性は無限だと考えた。親戚もあるので土地探しはスムーズに進み、資金借り入れなしで、その都度苗を購入して作付面積を増やしてきた。

間伐材堆肥などを使用した有機農法にこだわりながら3年目、今年の植栽はいままでに

▼ 水田も多い豊島



▶ レモンの種類はリスボン、ユールカ切り込みをして芽吹いた今年のレモン苗
▲ フルーツ農園経営者が夢と語る岡本さん

なく上達した。まだレモンでは収入はないが、昨年はわずかな収穫を関西方面の小売、卸の知人にサンプルテストで送った。また近頃大阪スローフード協会のスタッフが農園を訪ねて岡本さんの事業を応援してくれた。2年後には商品化流通できるのではと期待している。岡本さんは、将来まだまだ作付けを増やし、果物やオリーブなども植えて事業化し、豊島がフルーツの島として有名になるように頑張りたいと夢を語る。

文・カメラ/小林 恵



自給自足を目指す菅原さん。畑には、米と麦以外は、ほとんどの野菜があった



●夢見ていた田舎暮らしを実現！

菅原さんが和田町で暮らすようになって4年になる。朝6時に起きて、畑を耕し、庭木の手入れや家の修理をする毎日。畑では、米

退職後の第二の人生は、田舎でのんびりと畑を耕して暮らしたい。そんな熟年男性たちの夢をいとも簡単に手に入れ、悠々自適の生活を送っている人がいる。千葉県和田町に住む菅原文好さんだ。終の棲家として和田町を選んだ理由とは？ 住み心地は？ 現在の暮らしがりは？ 菅原さんの自給自足生活を取材するため、南房総の和田町を訪ねた。

●ムラ人の期待と笑顔に支えられて④

ネイチャーランド和田町わだまちで
自給自足的な生活を 菅原文好さん(千葉県)

と妻以外、ほとんどの野菜が育てられ、夢だった「自給自足の生活」が現実のものとなりつつある。

それまで勤めていた、埼玉県熊谷市の会社を辞めたのは52歳の時。定年まで、まだ、かなりの年数があった。

「60歳まで働いて、それから何かを始めようと思っても遅いと思ったんです。自分の好きなことをやるには、体力や気力のあるうちのほうがいいと。最初は外国に移住することや、伝統工芸の職人を目指すことも考えましたが、結局は田舎で畑を耕しながら、のんびり暮らすのが一番いいかなと…」

会社を辞めてから、各地の物件を探してまわった。そして、ある時、友人と一緒に立ち寄った鋸南町の不動産屋で、偶然、この物件を見つけた。和田町北部の農村にある築50年の家と5反の畑。元村長さんが住んでいたという家は、樺と杉のむく材を使って建てられたもので、古いながらもしっかりとしていた。建坪45坪の平屋建て。和室5部屋と洋間1つと台所。家も庭も広く、すぐそばを車が通れる道路が走っている。菅原さんはひと目でここが気に入って、定住を決意した。

●和田町の自然に魅せられて

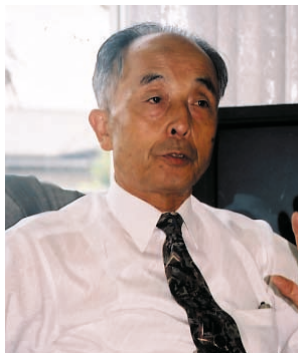
第二の人生の舞台として和田町を選んだ理由を、菅原さんに聞いてみた。
「山があって、海があって、自然が豊かで、気候が温暖。好きな釣りも楽しめるし、畑も

ある。ここなら私の目指す自給自足の生活が実現できると思ったんです」

房総半島の先端近くに位置する和田町は、人口およそ5800人の小さな町だ。3人に1人は老人という過疎の地だが、海、森、牧場、棚田と、自然の豊かさだけは折り紙つき。

「12月から春が来る」といわれるほど温暖な気候と、東京から2時間半という便利さも、定住を決意する上での好条件となったに違いない。

菅原さんのように田舎に定住することは難



◀「都会から来た人と町の人が、自然の中で学びながら交流してほしい」と語る、中山卯一郎町長

◀「日本の水浴場88選」に選ばれた和田町の美しい海(上)和田町は、日本に4カ所しかない捕鯨基地の一つであり、花卉栽培が盛ん。色鮮やかなお花畑とクジラのモニュメントが印象的な公園(下)





古い住宅は、菅原さんの手で修理され、快適な住まいに(上)
5反の畑には、ミカンやサクランボ、スモモなど、果樹が中心に植えられている(中)
竹細工などの体験ができる「くすの木」で時々、ボランティアをする菅原さん(下)



しくても、たまに田舎暮らしを楽しみたいと考える都会人は多い。そんな人たちを対象に、和田町では、自然体験教室・ネイチャースクール「わくわくWANDA」を開講している。米作り、野菜・果物作り、酪農などの農業体験をはじめ、竹細工や納豆・味噌づくりなどの調理加工体験、山野草の観察や林業体験、また、全国でも数少ない捕鯨基地のある和田ならではの「くじら学」も好評だ。そんなネイチャースクールの拠点となっているのが、廃校を利用した宿泊施設「くすの木」。住まいが近いこともあり、菅原さんは時々、ここで体験学習の手伝いをしている。おかげで、地元の人たちと仲良くなり、おかずや野菜をいただいたりすることもある。菅原さんいわく、「親しくしてもらおうコツは、こちらから心を開いて溶け込むようにすること」。

地元の人々と上手に付き合うことが、田

舎暮らしを快適にする秘訣なのかもしれない。

● **生きていく上で大切なものは…。**

自給自足の生活にも多少の現金は必要だ。菅原さんは、それを貯金から捻出しているという。

「都会ではお金がないと生活できないけど、ここでは現金はさほど必要ではないんですよ。車は動けばいい。着るものも清潔であればいい。お金をかけないで、楽しみながら暮らすぞうと思っています」

和田町で暮らすようになって、自分の生き方が、貝原益軒(江戸時代の儒学者)の説く人生観とよく似ていることに気がついたという。

「貝原益軒は、著書『養生訓』の中で、酒はほろ酔いがよく、食は腹八分目、身体をよく動かし、心を休めて、欲張らずに、自然の中



▶ 廃校となった上三原小学校を宿泊施設として地域の住民が管理・運営している「くすの木」(上)
昔、山間の村から海辺へと嫁ぐ花嫁が通った「花嫁街道」は絶好のウォーキングコース。落差15mの黒滝も必見(下)

でのんびり長生きをしなさい、と説いています。私も、便利で贅沢な暮らしよりも、自然に囲まれて、自由に生きることを選んだのです。サラリーマン時代は、仕事上のストレスや隣近所との付き合いにうんざりすることが多かったですが、ここではストレスもなく、毎日が爽快です」

生活の基盤はほぼ整ったので、今後は、自分が育てたものを加工し、味噌や醤油、抹茶などを作りたいという。

「それから陶芸の窯を築いて、自分で茶碗を焼きたい。空いているハウスでは、このあたりに生息している蝶を保護・飼育してみたい。そのために広い土地を手に入れたんです。将来的には、都会に住んでいる人で、自分と同じような趣味の人がいたら、ここで一緒に暮らせたらいいなあと考えています」

自然に囲まれた生活の中で、菅原さんの夢はどんどん広がっていくようである。

・和田町企画課 0470(47)5415

文/小田礼子 カメラ/塔美

スカイファーム園内で、左から山諸貴信さん、坂東哲顕さん、能津伸介さん



若者が高地で高糖度トマトに挑戦 スカイファーム「びゅあトマト」(高知県吾川村)

イタリア料理、パスタ、サラダ等の料理の普及で、年間を通して食卓に欠かせなくなったトマト。最近はおなじみの「桃太郎」に加えて「高糖度」をうたった「フルーツトマト」と表示されたトマトが人気を呼んでいる。この高糖度トマトの生産に、高知県の山間部、標高1000m近い山の上で若者たちが挑戦している。トマト栽培を始めるまでは農業の経験ゼロだった3人だが、3年目を迎え今年からいよいよ本格的な出荷が始まった。

「高糖度トマト」を村の特産品に

愛媛県との県境にある吾川村(人口3370人)は、村の東部を流れる仁淀川周辺に町並みを形成しているが、大半は山岳地帯。中津明神山に降る雨が長い年月をかけて造り上げた深谷・県立公園中津深谷には森の温泉「ゆの森」があり、他に樹齢500年の古木「ひょうたん桜」、太平洋を望みながら空中散歩が楽しめるハングライダー専用のフライト

場「吾川スカイパーク」等、森と深谷を生かした観光の町として注目されている村でもある。

高糖度トマトは、山林等の自然環境を活用して村の新たな重点作物として、村とJAが用地の整備とハウス施設の設置に当たったもので、標高800~1000mの山林の中の平端地を切り開いて設置した強剛な大規模ハウスが現在5箇所に点在している。研修を経て入村した新規就農の若者たち、新しいトマト栽培に賭ける農家の人たち、パートナーとして働くお母さんや見習い研修の若者たちなどで、山はかつてなく賑わい、活気を呈している。

一番高い標高950mの場所にあるのが3人の青年、能津伸介さん、坂東哲顕さん、山諸貴信さんの経営する農事組合法人スカイファーム。村とJAが募集した就農研修事業の一期生でもある。高糖度トマトに早くから注目、イターンしてトマト栽培に取り組んでいた坂本克彦さん(32)の元で2年間研修を受けた

けた後、70aの温室を借り受け、平成12年11月に法人を設立した。高糖度トマトは「びゅあトマト」というブランド名で、高



上/中津深谷「ゆの森」宿泊・交流施設
下/雲・霧が下の方から上がってくる
上名野川地区



地の環境を生かして端境期の夏から秋にかけて収穫される。

中津深谷を眼下に望む集落を越えて

高知県と松山を結ぶ幹線・国道33号を左手に入っていくと間もなく名勝中津深谷が現れた。巨大な岩石が連なる荘烈な深谷で、その岩場に吾川産の木材を使ったお洒落な木造建築・温泉&宿泊施設「ゆの森」が建っている。環境に調和したクアハウス仕様で、ロジも3棟ある。森の美味しい空気と温泉、自慢の手料理が人気を呼び、年間を通じて宿泊予約がいっぱいなのだ。

ここから道路は一気に勾配となり深い森に入るが、森を抜けると斜面を生かして石垣を組んだ家々が高い密度で点在する。下名野川、上名野川地区と続き、遙か眼下に町並みを望むようになる。霧が下の方から吹き上げて来て斜面に植えられた茶畑を潤す。「昔は四国一番の高級茶の産地でした。今は残念ながら生産者が減って来たので他所とブレンドして売られているんです」と後に農家の人から聞いた。集落を縫っていく道路からも手入れのよい茶畑とそうでない畑、草花の美しい家の庭廻りなどが一目でわかり、多くの家が若い人は街へ下りてしまい、親たちだけが暮している様子が伺える。

集落のある地区の最高標高は約600m。その先は杉や檜、落葉樹の森で、道は蛇行しながらさらに続き、やがて右手の広い平端地に大きなビニールハウス群が現れた。西森常晴さんや地元農家が営農する「てっぺんトマト」の栽培園(後述)で、標高は約800mだという。

さらに走っていくと道はやがて舗装から砂利になり、右折すると青空の下に広大なビニールハウスが出現した。「びゅあトマト」を



強力な鉄骨造り・70aのトマトハウス

生産するスカイファームである。標高約950mの高地に建設された70aの大規模園芸施設である。

村の支援や期待に応えたい

ガラス戸を開けてハウスの中へ入ると、トマトの青臭い懐かしい匂いがほんのり漂ってきた。ムツとした匂いではないのは、水分をギリギリまでセーブしているのだから、葉の茂り密度が少ないせいだろう。その分実を沢山つけているが小ぶりだ。明るくて広い園内の遥か奥の方でパートで働く女性たちの姿を確認、間もなく手車を曳く坂東さんが現れた。能津さんは採れたてのトマトを持って山を下り、高知市の農産物集荷施設へ挨拶廻りに出かけて留守。ハウス前の事務所兼出荷作業所の建物で山諸さん、坂東さんにお話を伺った。

山諸貴信さん(27)は、高知大学農学部を



出て一般企業に半年間勤めた後、辞めて吾川村の新規就農者募集に応募した。「農業はまったく素人で、関心も特にあつたわけではないんです。どちらかと言うと人見知りする性格で、人間と接触する仕事より自然や技術を生かした仕事がしたいと大学は農学部を選び、農業研修生を募集しているという吾川村の企画に飛びつきました。しかしこれからはトマトの販売のためにいろいろな人に接していかなければいけませんね」

坂東哲顕さん(34)は長年勤めた電力会社を辞めて新しい農業に賭けてみようと思入村した。「農業には昔から興味がありました。2年間坂本さんのところで研修し、転職を決意しました。技術屋だった経験も活かしていけると思いました」

トマトに接する坂東さんの眼差しはやさしく、仕事への充実感が感じられる。

二人は村の町中に各々部屋を借りているので、仕事を終えて山を降りると新住民の一人、5年目になるので地域活動にもできるだけ参加し交流を深めている。

一方、ハウスには地域のお母さんたちが4〜5人パートで働いている。苗木の手入れや花摘み等の細かい作業を担っており、「農家の主婦達は遅しい。よく働いてくれるので大助かりしている」と3人から高い評価を得ている。

働いている女性は「地元の若い人が農業離れしているのに3人には感心します。私たちにとってここは貴重な収入が得られる職場なので、ぜひ成功して、地元の若者がUターンする機会になって欲しいです」と語っていた。家の野菜や手料理なども差し入れしてくれるように、山諸さんと坂東さんは、

「研修制度や村の支援がなかったらここまで



時間をかけて実をつける
高糖度トマト

トマトの苗木や花卉の手入れをする
坂東さん



やって来られませんでした。村人がとても親切で何かと力になってくれます。そのためにも地域の人からここにハウスが出来てよかつと言われるように頑張らないと……」と語る。

スカイファームの代表者・能津伸介さん（41）は高知市の元介護士。病院に勤めたり介護教室で指導に当たっていた。3人の子供がいるが、新規就農の研修を受ける時、家族を犠牲しなければいいと奥さんは反対しなかった。現在も家族と高知市に住み、朝6時にクルマで家を出て2時間かけてスカイファームに到着。夜も7時、8時に家に帰る生活を繰り返している。仕事の期間は山奥で暮らすという昔の人たちと違って、今の人は仕事と生活を上手に使い分けているようだ。

しかし3人とも山の上まで狭い坂道を毎日往復することがさほど気にならないように、「慣れてしまつてしまつてしまつてことないですよ。」

度や湿度もコンピュータ管理ができる。しかし冬はマイナス10度以上になるため、膨大な暖房代をかけると採算がとれない。そのため10月で出荷は終了、後は枯れた苗木の整理と土おこしを年末までして、しばらく休養、年が開けて2月頃からまた新しい苗木育成の作業が始まる。設備費は5億円。国や県、村の制度資金を活用して建設されたが、4分の1はスカイファームが15年かけて返済していく。JAを窓口に行っているため、収穫したトマトはJAを通して出荷することになる。

「2年間研修を受けて新規就農することを条件に各種の助成金が活用でき、研修中も給与を頂きましたので自己資金はゼロでした。村には同様な方法で個人でハウス栽培を始めた人が何人かいますが、我々はマンパワーの部分で効率化を図り、自分の不得意な部分は互いに補つていこうと3人で農事組合法人を設

冬の農閑期でも何かと理由をつけて殆ど毎日やってきます。今は恋人がいないので、このハウスが恋人ですね」と山諸さんは言う。

過酷に野生的に育てる 高糖度 トマトの秘密

スカイファームの70aの温室には6月から9月の出荷に併せて大小の苗が植えられている。風速40mの台風にも耐えられる強剛な施設で、山の自然の空気を取り入れるように天井の窓も開閉式で、温



▲ 収穫したトマトの品質は？ チェックと等級分け作業
▶ 収穫作業は朝8時から始まる（山諸さん）

立しました。覚悟はしていましたが経営は厳しいですね」

夏を除いて暖房費がかかる、パートさんへの支払いもある。受粉用に放つマルハナバチも2ヵ月ごとに交換して4、5箱づつ必要で、一箱2万円はする。クルマでパートで働く人たちが街で拾って出社し、5時にはまた全員を乗せて山を降りるため、車輛数台が必要だが、悪路もあるので痛みが早く故障しやすい。そのためにも高品質なトマトの生産性を高めなければと3人は思っており、「今年は3年目、正念場です」と語っていた。

さて、高糖度「びゅあトマト」とはどういうものだろうか。

トマトはもともと南米チリの乾燥地帯が原産地で、このトマトの種もそれに近いものを原産地の状況に近づけて栽培している。そのため、施設の中の地面は乾き、葉や茎も小ぶ





りだ。トマトの苗木の根元には細いパイプが通っていて、水分と栄養補給はその細いパイプから点滴のようにして最低限しか与えない。野生に近い過酷な条件で育てることにより、トマトは種保存の本能から全身全力で結実をしていく。小さいが中身の濃い、とびきり旨い高糖度トマトの誕生である。一般のトマトは水に入れると浮くが、高糖度トマトは沈む。完熟していてもしっかりとした表皮で被っているので、つぶれてべとつくことが少ない。糖度が高く「フルーツトマト」とも言われている。口に入れると甘さと酸味、特有の薫りが広がり、とにかく旨い。昔子供の頃、川へ泳ぎに行った夏休みに農家の畑から失敗して食べたトマトを思い出したものである。

翌朝再びスカイファームへ行くと、トマトの収穫が行われていた。収穫したトマトはテールに並べ、AからDまで4段階に分けていく。Aはほんのり赤みをつけた中玉で、糖度は8以上と決められているのだが、収穫した全体の30%にも満たないらしい。選別したトマトは翌朝出荷、デパートやレストランには4日ほど後に赤くなり糖度もさらに1、2度高くなって届くようで、出荷時点で1個200円が、デパート等では500円の値段がつくという。畑で赤く熟したものはランクに近いところで実をつける大粒なものはランクは下だそうで、その一つを糖度計で測ってもらったら「糖度10」を示していた。もちろんこれらの完熟トマトも近くの店で手頃な価格で売られているので、人気を呼んでいる。

「いまは人手不足から個別の発送は無理で」Aを中心に出荷していますが、将来は都市の人に直接、手頃な御中元として届けたいというのが僕らの願い。高知の山の上で育てた夏の特産品にしたいです」と能津さんは言っていた。

過疎の村を高級トマトの産地に 第三の人生を「てっぺんトマト」に賭ける……西森常晴さん



スカイファームに行く途中の標高800mのところ、西森常晴さんのトマトハウスがある。「てっぺんトマト」がブランド名で、他に「よしこさんのトマト」というユニークな愛称で直接市場や大型小売店、道の駅等に卸している。西森さんは吾川村出身だが、27才まで東京で公務員をしていた。帰郷後は福祉・教育関係の仕事に携わって来たが、坂本克彦さんのところで高糖度トマト栽培を研修してから、第二、第三の人生をトマト栽培に賭けてみたいと、スカイファームの若者達と同時期にスタートした。名刺には「ドン百姓」と印刷してある。子供たちも成人して家を出たりで自家野菜程度はつくって来たが、本格的に営農するのは初めて。

「林業も地場産業のお茶もダメで過疎化が進んでいる。高糖度トマト（ハイブリッドトマト）は村の特産品になるのではないかと自ら百姓になることにしました。大変だけれど楽しくて充実した毎日ですよ」と目を輝かせる常晴さんに、奥さんが笑いながら「何にでも夢中になり猛勉強するタイプで、人生は何度

でもやりなおせると思っています」と言う。本や趣味の陶芸品などに囲まれた家で語る西森さんからは「百姓」のイメージはなかったが、翌朝ハウスを訪ねるとテキパキと働く農場主の西森さんがいた。研修生の大野敬他君（22）と手伝いに来た奥さんの3人で収穫したトマトを仕分けしている。Aクラスのトマトが予定通り収穫できたようで、東京へ出せば16個3600円になるといつ。「よしこさんのトマト」は特Aクラスよりやや赤みがあり粒も均一ではないが、5、6個で500円。戴いたが少し酸味が効いていてとても美味しい。

本格的な農業経験はないとはいえ大地や植物にふれてきた西森さんだけに栽培にはさまざまな工夫をしている。マルチを辞めて地面には藁を敷き米ぬかをまいている。パイプは根元から30cm離してあり、時間をかけてゆっくり水やりすると、トマトはしっかりと根を張るのだという。雨の日は葉や実が傷付きやすいので作業をしない等々、その博学ぶりと説明の上手さにメモをとるのを忘れるほど。

「藁と米ぬかは減農薬栽培の手法だが、今は藁も貴重でスカイファームの青年が手に入れることは難しいかもしれないなあ」とつぶやいたあと「彼らには頑張ってもらいたい。いいトマトを量産できれば充分ペイできると思います。いまは技術的に対応していくだけで精一杯だろうけれど、農民の知恵や自然の素晴らしさも自然に身につけてくるでしょう」と語っていた。

・吾川村産業建設課 ☎0889 (35) 0111



西森さんの「てっぺんトマト」ハウスでの収穫作業
右は研修生の大野君

文 / 浅井登美子 写真 / 小林 恵



最新の育苗工場は 都市からの若者で大賑わい

(有)竹内園芸 (徳島県板野町)



四国徳島の温暖な気候条件を背景に、テクノロジー技術と最新設備を駆使した育苗工場。働く社員の半数が都会や周辺市町から新規就農してきた若者たちで、土づくり、発芽、育苗等の仕事や自然環境に恵まれた板野町での暮らしに満足している。職場結婚してこの地で家庭を持つ人も多くなり、経営者の竹内夫妻は、「皆が安心して食べていけるように」とと苗種生産販売の拡大、苗や土を直売する園芸店の開設など、雇用の場の安定・確保と、緑のある生活を町の特色にしたいと思っている。

高品質の苗を、播種から育苗、出荷までハイクオリティな育苗工場

徳島市や徳島空港にも近い板野町(人口1万4500人)は、神戸淡路鳴門自動車道から来れば四国への玄関口にも当たり、住宅・産業都市として大きく発展してきている。しかし旧吉野川周辺は昔からの豊かな水田地帯で、(有)竹内園芸もそんな一角にある。

稲苗の出荷を終えて次の準備に入る前のハウスが数棟、その先に事務所があり、竹内勝専務が我々を迎えてくれた。

「うちは奥さんが社長だからね」と言って、取りあえずスリッパ姿のまま各地に点在する園芸施設へ車で案内してくれた。後にお会いした竹内育美社長とともに、日焼けして遅しく「農業大好き」を感じさせる気さくな夫婦。

「育苗は土、水、気温や湿度など大変微妙な作業で、農家の植栽時期にぴったり併せていい苗を用意しなければ



竹内園芸の大規模施設。右が土造り工場・左が花卉農園と発芽・育苗ハウス
下/自動的に土詰めした育苗土は全国へ出荷される



大小の種子、変型した種子をきっちり播く自動播種機



丈夫な苗木を作るために接木が大切な作業。作業する中国からの研修生



接木した苗は養生室で活着させる

ならない。社員がそれぞれ分担して責任をもつて作業してもらうためには、我々がしっかりと現場を知っておかねばならぬ」

野菜苗の生産販売を中心に発展してきたが、その種類は100種、年間5000万本を育苗する。さらに最近では花卉の育苗販売部門の需要も多く、花卉だけで100種以上を育てており、こちらには女性たちが大勢働いている。

車で4〜5分走ると、田園の中に近代的な施設群が見えて来た。私の想像をはるかに超える大規模な工場群である。道路の右手には園芸に必要な有機質で病原菌のない土を造る工場がある。この土は同社の施設でも使用するが、セルフレイに詰められて全国各地の園芸店でも市販されている。

左手の、幾つかの施設が機能的に連動した広い建物の中では、種播き、発芽、育苗、接木などが主として女性たちの手で行われている。最新の機器を使つての作業だから肉体的労働は少ないが、女性ならではの神経の細やかさと根気が求められる職場である。

まず種を播いて発芽させるコーナー。播種

機というアイデアに富んだ機器があり、台の上に小さい種、変型した種もひと粒ずつ一定間隔で並べられると、それに数mの土を入れた鉢がびたりと被さる。機能的に播かれた種は、最適な温度・湿度・照明をコントロールした発芽室に入れられて数日間を過ごし、均一に発芽される。種を取り付けた台紙はやがて溶けて栄養分になるといふ。

発芽した苗は太陽の柔らかい日ざしと湿度や水を調整した育苗ハウスで、20日から1カ月かけて根張りのよいたくましい苗に育てられる。見学した時は数センチ位のネギの苗が一面に育っていたが、ネギは一度刈り上げて太い茎に仕上げていくという。その奥には大根の苗が小さな葉を左右に伸ばしている。新しい生命の息吹きに感動するハウスである。

成長した植物は一回り大きなトレーに移植されてさらにたくましくなり、野菜の場合は接木という作業を行う。接木は病気に強いダイ木という苗木に別の野菜苗を接ぐもので、トマト、茄子、スイカ、メロン、ピーマンなどは皆接木され市販されているという。この作業は拡大鏡を通してよく切れるナイフで茎

を切つて素早く繋げる経験と根気さが求められる作業で、ベテランの女性たちが担当している。

接木した苗は、短期間に安全に健康に活着するための「養生室」で数週間過ごした後、一般のハウスに移されて自然環境にも適応できる強い苗に育成、やがて各地へ嫁いでいく。植える地域の要望に併せての配達だけに、嫁入りには細心の注意がなされる。

なんと種代だけで年間1億円以上だそうで、竹内園芸の苗は北海道から首都圏、関西、沖縄まで届けられている。私たちが食べている野菜のふるさととはここだったかもしれない、多くの人々が精魂を込めて育てた野菜や草花に感謝しなくてはと思った。

5人採用に150人が応募

花卉栽培を行う園芸部門では、今年3月に入社した大西和枝さん(22)と河村江里子さん(20)が働いていた。大西さんは大阪府堺市、河村さんは兵庫県西宮市の出身。共に大阪の花の専門学校で2年間学び、学校に来た竹内園芸の社員募集に応募した。



ネギの苗(右)と一般ハウスの育苗用キュウリの苗(左)



新規就農してきて、いまはベテランの若者たち。左から林さん、小川さん、奥村さん

「希望した職場なので満足しています。二人ともアパートを借りて独り暮らしをしています。ここは都会と変わらない程便利なので、楽しく働いています」
 「親も賛成してくれました。水やり、土壌づくり、害虫対策など、現場で学び直すことがいろいろあります。これからの季節は暑さとの闘いですが、植物に囲まれているので快適に働けそうです」と二人は語り、広い園内を



▲野菜苗を栽培するハウス群。ちょっとした街並みのようだ

キビキビ動き回っていた。
 今年は5人採用に150人が応募するという狭き門だったようだ。

事務所に近いハウス群では、出荷が近い野菜類の育成、点検等が男性社員たちの手で行われていた。新規就農者の第一号として5年前に来町したのが奥村理さん(29)。東京農大出身、竹内社長の農業経営への実践力と夢に共感した。結婚間もない奥さんと来て、奥さんも2年間ハウスで働いていたが、今は出産・育児中。

林淳一さん(29)は元会社員でニュージールランドへ一年間行って来た後、竹内園芸に就職、地元的女性と職場結婚、一児の父親でもある。小川貴土さん(29)も広島市から会社勤めを辞めて新規就農、同郷から来た女性と結婚して、一児の父親になっている。

3人は、同社の重要作物、稲やトマト、茄子等の定植前の育苗を行うハウスの責任者で、若手の指導にも当たっている。今後独立して育苗事業を行うとか野菜・花卉の栽培をする計画はあるのかと聞いたところ、「これだけ設備投資をし、多くの社員を雇用して管理運営していくのは本当に大変だと思う。



▲ガーデンセンターで働く奈良県出身の高森さんとガーデンセンター「四季彩」





与をもらって精一杯働いていく方がいいです
ね」
「ここは職場環境も家庭を持って子育てして
いく環境も最高です」と3人は語っていた。
板野町は日中友好の活動を行っており、同
社も中国からの研修生を受け入れている。現
在4人の女性が研修中で、接木などの作業に
取り組んでいた。

ガーデンセンターも開設 植物を通じて、人々の心を豊かに

社員が家庭を持ち子どもが出来るように
なると、経営者としては当然生活面の保障や住
宅手当等が必要となり、繁忙期だけのパー
トタイマーという訳にはいかない。

「売り上げの拡大と、当社の苗木がいかに品
質的にもいいかを地域の人知ってもらいた
いと、昨年『四季彩』というガーデンセンタ
ーをオープンしました」と竹内専務は言っ
て、その園芸店に案内してくれた。

その車の中で竹内専務は、こんなエピソードを語った。

「うちからスイカの苗を買って庭先で育てて
いたある主婦のところへ自閉症らしい女の子
が毎日立ち寄り、花が咲き実をつけて少しづ
つ大きくなっていく様子を見て帰っていくよ
うになったそうです。少女はスイカの苗木の
脇に立って目を輝かせて眺め、やがて『大き
くなったね』と嬉しそうに言うようになった。
夏になり一個の立派なスイカが取れたが、夫
妻は自分達で食べるのを辞めて、少女の家に
届けたそうです。こいついつ話を聞くと、植物
は単に食べるための野菜ではなく、人々の心
を癒し豊かにしてくれるもの。キュウリやト

マトの育苗も農家の生産用のためだけでな
く、ペランダ園芸として若い人々にも楽し
んでもらいたいと思いますね」

ガーデンセンター「四季彩」は公園並みの
スペースを持ち、園芸部が育成した花卉、野
菜・果物苗、関連商品が市価よりかなり安く
売られている。遠くから来る人も多く、「花
を見るのが好きで毎日のように来ています」
と子供連れの主婦が言っていた。ここで働い
ている高森香奈子さん(22)も昨年4月に奈
良県からやってきた。「体力も必要なので、
よく食べよく動き、とても健康的な生活を
しています」とニコリ。

地域からの出店の要請もあり、今年9月に
は2号店も開設することになっている。

事務所へ戻ると、現場廻りをしてきた竹内
育美社長が帰社していた。

竹内園芸は、三代続く漬け物屋で奈良漬け
用の白瓜を育成して漬け込み関西へ出荷して
いた。結婚後は子育てをしながら家業を手伝
った。しかし親の仕事を手伝っても小遣い程
度しかもらえない。両親の了解を得て昭和47
年に夫妻で独立、162㎡のビニールハウス
でスイカ苗を1000本育苗したのを契機に
年々施設を増設、57年に有限会社を設立した。
平成元年には1万㎡を超える規模へと拡大、
先進農業の旗手として日本農業最優秀賞、徳
島新聞産業賞等を受賞している。平成8年
には農業組合法人徳島野菜育苗組合を設立、地
域の若者の雇用に加えて都市に住む若者にも
就農を呼びかけてきた。

竹内育美社長は「大学などで自然科学や農
業学を学んでもペーパーと実際はかなり異な
ります。植物はその時の環境で変化する、そ
れに対応できる力を植物にふれながら学んで
欲しいと思います。やればやれるだけのこと
を植物は応えてくれます」



種の仕入れから現場の進行まで何でも手が
ける凄腕の女性経営者だが、社員たちにとっ
ては頼もしいお母さんの存在である。
なぜか社員の誰よりも日焼けしている夫妻
は「利益追求よりも緑の中で皆が楽しく働け
る職場にしたいね。それが利益にもつながる
と思います」と言っ、カメラの前で照れく
さそうに腕を組んでくれた。

(有)竹内園芸 088(672)3690
文/浅井登美子 カメラ/小林恵

現場で実際に作業にも当たる竹内夫妻
(育美社長と勝専務)

レンタルハウスで施設園芸 特産のイチゴ、無農薬野菜を

(高知県佐川町)

高知県は施設園芸農業をはじめようとする人(財)高知県農業公社が土地付きで園芸関連施設を貸し出す「土地付きレンタルハウス事業」と、新規就農者に市町村やJAが園芸用ビニールハウスを貸し出す「新規参入等園芸用レンタルハウス事業」を行い、ビジネスとしての農業への取り組みを支援している。レンタルハウスを導入して無農薬チンゲンサイづくり、イチゴ栽培に取り組み佐川町の新規農業青年2人を取材した。

イチゴハウスの前で、加藤さん



夫婦で独立して 佐川特産のイチゴ栽培

●加藤佳光さん

多く、近年はイチゴの産地として知られる地域。加藤佳光さん(35)も地元的女性・香奈さん(29)と結婚したのを機に、香奈さんの両親の元でイチゴ栽培を研修、3年前に親達のハウスの隣に2棟を新設して独立採算による農業経営に乗り出した。

「佐川町は高知県産のイチゴのほぼ半分を生産しています。ここは美味しいと好評で関西のデパートに出荷されていますよ」と語る香奈さんの父親・田村憲正さんは、もう20年間イチゴ栽培を手がけて来たベテランで、現在田村ハウスでは35aを栽培している。今は

佐川町(人口1万5000人)は虚空蔵山の麓に広がる田園地帯で、土佐藩家老深尾氏が統治した城下町として発展、ドイツ人の地質学者ナウマンが数百年前に訪れて貴重な化石を発見した町、植物学者牧野富太郎の故郷としても知られる文教のまち。温度差の大きい気候を利用してお茶やイチゴ、新高梨、リンゴ栽培が盛んで、高知を代表する地酒「司牡丹」の蔵元もある。



苗を切り取ったあとに水を張ったハウス



奥さんの両親、田村さん夫婦の指導を受けながら作業(土づくりをして種播き)

トチオトメという品種が人気で、そのために栃木県まで研修に行き地域の農家の指導にも当たって来たというリーダーだ。

そんな田村さんの家に同居してイチゴ栽培の手伝いを始めた加藤さんだが「自立して独立採算でやらないと実力が出かない」と、義父より休耕田を借りてもらい、そこに町と



Aの協力を得てレンタルハウスを新設した。加藤ハウスは13a。「6月中旬で出荷を終えるので今は少し暇がありますが、出荷の最盛期にはかなり忙しい。まだまだ勉強することが沢山あるので一人1反歩位が丁度いいですね」と新入生の加藤さんは言う。

加藤さんは松山市出身、高知大学理学部を出て、佐川町で学習塾に勤務していて、香奈さんと知り合った。

「妻の両親が意欲的に農業に取り組み姿を見て興味を持ちました。農業を使わない高精度のイチゴをつくりたい、そのために土づくりには細かく砕いた石に粉殻などを入れて寝かせる等いろいろ勉強しています。早く作るよりもいい苗を育て害虫を寄せないことが大切ですが、それでも春から夏になる頃には虫が発生します。苗を刈り取った後土を耕して40〜50日間水を張ると病害虫退治になるというので、今年は自分もやるのかな」と近くの水を張ったハウスへ案内してくれた。

レンタルハウスは台風にも強く、元水田だったことから水はけ用の水路を設置、借用料として年間30数万円を10年間支払う。毎年ピニールを張り替えたり園内に放す蜂代などのコストを引くとトントンだが、「農業は大変だが楽しい。この辺りでも若い農業者がいなくなっているのでは、やればやれるというところを見せたいと思っています」と語る。

今年の収穫期は終わったが、家の庭では田村夫妻と加藤さんが次の準備に取りかかっていた。ゲージに種を播いて14度の低室温に20日間ほど置き、顕微鏡で発芽を確認したら外へ出して苗を育成する。土づくりや育苗については加藤さんはまだまだ素人、田村さんの作業を手伝いながら勉強中だ。11月中旬からの出荷をめざして、8月にはまた連日ハウスでの作業が始まる。

家族の協力に支えられて 無農薬チンゲンサイ栽培

●武政二三彦さん



商店街のある町の中心部から一歩出ると、そこは水田の広がる農村となり、雑木林と稲田を望む室原集落の一角に武政さんの家があった。一階が作業場になっていて、二、三階が瀟洒な自宅。作業場では奥さんの由美さんとそのお父さん・柳瀬安宏さんが、収穫したチンゲンサイの選別と袋詰め作業をしている。

土砂降りの中を武政さん(38)の車が到着した。ハウスから探って来たチンゲンサイを濡らさないように注意しながら下ろす。柳瀬

さんが外側の葉を取り除き、由美さんが大小の大きさに分け、3個を一つにしてピニール袋に入れて、段ボール箱につめていく。

野菜を下ろすと武政さんは車で4、5分のところにあるハウスへ案内してくれた。40aの農地を賃借し、平成11年9月にレンタルハウス26aを開設した。広いハウスでは800株単位に収穫時期をずらしながら栽培、無農薬有機栽培を行うために入り口、区分けした内部の各所に厚手のピニールや網戸を張り、害虫の侵入を防ぐ工夫をしている。

「それでも今年は害虫が発生して困っています。一旦侵入してしまつと気密性が高いので繁殖しやすいんです。素手で除去するにも限界がありますから、発生は一カ所だけで押さえて他に転移するのを防ぐしかありません」

ほんの少しだけ農薬を使うことは？、と聞くと「農薬も化学肥料も絶対使いたくありません」と武政さんはきっぱり言った。少し虫食いの葉であっても、消費者は農薬を使わないことを知って買ってくれている。4年間で



上/ 今年は害虫の発生に苦労している。
チンゲンサイハウスで武政さん
下/ 選別して袋詰め作業する武政さん夫妻

築いたその信頼を裏切ることではできない。
無農業有機栽培はこの地方でも実践者が少なく、あらゆる専門書を読み静岡の農家へ話を聞きに行く等して試行錯誤を繰り返してきたという。

「主人は頑固ですからね。でも息子の敏（5歳）が採れたてのものを生でバリバリ食べているのを見ると、農業は使えませぬね。サラダで食べても美味しいんですよ」と由美さん。武政さんの家は父親（5年前に死去）が大工さんをする非農家だった。10年前に高知市の由美さんと結婚、父親が丹精こめて新築してくれた佐川町の実家に妻子を残して、愛媛県西条市のコンピュータ関係会社に単身赴任していた武政さんだったが、東京本社が大阪へ転勤の話が出て来たのを機に退職して、昔からの夢だった農業を始める決心をした。「話を聞いて、ウソって言ったら、真剣な目をしているので、本気なんだなと思いました」と由美さんは振り返る。

実践農業大学窪川校に通って環境保全型畑作を学ぶ一方、農地を持たない武政さんは役場や関係機関に相談した。彼の熱意を知った地元の農業委員さんが、別の人が米を作るために借りることになっていた農地を都合してくれ、ニラを作ってはどうかと勧めた。「ニラづくり農家は大勢いるので先輩たちに追いつくのは大変。一年に9作つくれるチンゲンサイなら失敗しても何とかやれる。無農業については難しいから止めると皆に言われましたが、その苦勞をしましょうと宣言して始めたのです。しかしハンパな苦勞じゃないですね。土づくりが大切ですが肥料を使うとハムシなどの害虫がふえてしまう。堆肥代わりに米ぬかを使い、それを食べた微生物が死ぬことで有機質な窒素、リン酸の土壌になるのですが、なかなかそういきません」

苦勞する武政さんに力強い助っ人が現れた。それは由美さんのご両親・柳瀬さん夫妻。平成10年に高知市にある材木の市場を運営する会社を定年退職した柳瀬さんは、自然や植物には関心を持って来たので、チンゲンサイ栽培を手伝おうと言ってくれた。ご主人の安宏さんは農園のアシスタント作業、奥さんの久さんは育児の手伝いや食事等の世話。

二人は朝6時50分に高知市の家を出て佐川町の武政さん宅に7時半頃着く。それぞれが作業や家事・育児を手伝い、昼食は家族皆で取るが、夕方にはきちんと切り上げて高知市へ帰っていく。

「どんな場合も泊りません。帰ってから風呂に入り夕食を取ります」と安宏さんは言う。それが愛情であり、親子であってもスマーフトにビジネスライクにつき合っていくコツのようだ。

子供の美久ちゃんは小学校4年生、敏君は5歳の幼稚園児となり、家のこともよく手伝うようになった。「うちのチンゲンサイはとも美味しいよ、学校給食にもたまに出るんだよ」と美久ちゃんはPRも忘れない。由美さんが笑いながら「中華料理だけでなくお浸しや玉子とじなど何にでも合います」と答える。働く親たちの隣で遊んだりお喋りをする子供たちは楽しそうに誇らしげだ。

「こういう家族っていいな」としみじみ思いながら、雨上がりの町にさよならをした。

「高知県レンタルハウス事業」

野菜、花、果樹などを低農業で計画生産していくために施設園芸農業が求められている。高知県では土地付き園芸関連施設、新規参入者用の園芸レンタルハウス等を貸し出す制度を設け、水田の転作や休耕田の活用、農家収入の拡大と農業人口の増加をめざしている。



両親の手伝いが若い夫妻にとって大きな支え。家族そろって作業場で

園芸施設の支援に当たっては、経費の1/3づつを県、市町村、農業公社（JA）が負担し、農業公社の負担分および農地の借り上げ料が毎年レンタル料となる。標準レンタル料は、年間30〜60万円、賃借契約は原則5年間だが、再度の契約も可能。

・佐川町役場産業振興課

☎0889（22）7700

文/浅井登美子 カメラ/小林恵

酪農ヘルパーを希望する人に

酪農ヘルパーになりたい人、酪農家で研修して将来酪農を始めたいと思っている人を対象にした相談や研修機関の紹介等を行っている。問い合わせは酪農ヘルパー全国協会へ。☎03-5524-0037

酪農研修施設は北海道に多く、女性を対象にした新得町のレディースファームスクール(p.8~10)をはじめ、浜頓別町の「ゆめ酪農」育てる会(事務局☎01634-2-2229)、別海町「酪農研修農場」(☎01537-1050)などがある。酪農の体験実習については(社)北海道農業担い手育成センターでも受け付けている。

インターネットで農業を学ぶ 高知県「新しいなかビジネススクール」

新規就農する人、1・Uターンする人に農業等をPRするため設けた学校で、全国へ呼びかけることができるインターネットを採用している。7月開校、8ヶ月のコースになっていて、毎月1日にメールで教材を送信。受講者は自分のペースで勉強して月に1回レポートをメールで提出する。卒業後は進路相談や新規就農受け入れ、支援策等が提供され、希望者にはスクーリング(農業体験実習)がある。費用は10,000円だが、スクーリングは別途に実費が必要(8月、10月の2回実施)。

このスクールは平成10年にスタート、都市の若い人に人気で、平成14年までに295名が入学し、202名が卒業した。

インターネットで農業を学びスクーリングに参加した後、新規就農者受け入れに熱心な田野町へ移住したAさんは「教材が大学でも使える程の難しいものだったが、県の熱意が伝わってきた」と話す。問い合わせは高知県農業大学校研修課☎088-024-0007

農業会議の一員として実習 山形県

山形県では農業実習希望者と実習先(経営者)との合同面談会を開催し、事前に実習内容や条件を話し合う。両者の希望が一致した場合は、山形県農業会議が面接して実習先を決定、1年間は農業会議の職員として給与が支払われる。同時に農地や住宅など就農に必要なものが準備される。山形県農業会議☎023-622-8716



産業体験者の6割が定住 (財)ふるさと島根定住財団

島根県の農業、林業、水産業、伝統工芸、観光業等で後継者不足に悩む産業を県内外の人に体験してもらい、地域に定住してもらいたいと「ふるさと島根定住財団」が平成4年に発足、34市町村87団体(平成12年)が産業体験者を受け入れている。短期滞在型と長期滞在型があり、定住財団が滞在費の一部を負担している。平成8年から4年間で約350人を受け入れ250人が体験を修了、うち141人がその後も島根県に定住しており、定住率は58%に達している。

主な産業体験例は、安来市がネギ、キャベツ等の野菜栽培、横田町が総合農場での

農産物生産加工とハウスでの花卉栽培、旭町がナシ園での栽培管理、弥栄村が大豆の有機栽培と味噌づくり、津和野町が水稲と牛放牧、果樹、都万村が隠岐の島でのリゾート施設やマリンスポーツのインストラクター等、産業体験も農業を中心にいろいろあり、受講生に人気がある。町独自の制度とリンクさせている横田町では、多数の研修生が定住、1ターン者による農業生産法人「さあやファーム」も設立されて、新規就農者の受け皿にもなっている。(財)ふるさと島根定住財団/松江市・島根県商工会館5階☎0852-28-1008

女性経営者が多数誕生 「やまぐち女性起業家スクール」

全国に先駆けて平成4年に開設したスクールで、女性の優れた生活感覚を活かして事業を創出し、地域の活性化に繋げたいというもので、山口市のホールを会場にして12月から翌年の2月までの日曜日に6日間行われる。内容は当初は「入門」「実践」コースだったが、具体的な専門知識を身につけたいという要望から「実践」「テイクオフ」コースに変更した。定員は10名で県外からの参加もOK。山口県商工労働部☎083-933-3180

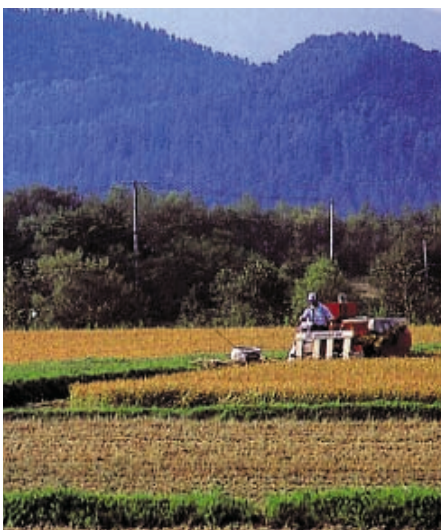
都道府県青年農業者育成センター

指定法人	電話番号	指定法人	電話番号
(社)北海道農業担い手育成センター	011(271)2255	(財)滋賀県農林漁業後継者特別対策基金	077(523)5505
(社)青森県農村開発公社	011(773)3131	(社)京都府農業開発公社	075(417)6847
(財)岩手県農業公社	019(623)9390	(財)大阪府みどり公社	06(6266)8916
(財)みやぎ農業担い手基金	022(264)8283	(財)ひょうご農村活性化公社	078(361)8114
(社)秋田県農業公社	018(884)5554	(財)奈良県農業振興公社	0742(23)6148
(財)山形県農業振興機構	023(635)0589	(財)和歌山県農業公社	073(432)4111
(財)福島県農業振興公社	024(521)9848	(財)鳥取県農業担い手育成基金	0857(26)7276
(財)茨城県農林振興公社	029(239)7131	(財)しまね農業振興公社	0852(32)2300
(財)栃木県農業振興公社	028(648)9511	(財)岡山県農林漁業担い手育成財団	086(226)7423
(財)群馬県農業公社	027(251)1220	(財)広島県農業青年育成基金	082(223)3232
(社)埼玉県農業振興公社	048(558)3555	(財)山口県新規就農支援センター	083(973)5061
(社)千葉県農業開発公社	043(222)9136	(財)徳島県農業開発公社	088(621)3083
(財)東京都農林水産振興財団	042(528)1357	(財)香川県農業振興基金協会	087(825)0347
(社)神奈川県農業公社	045(651)1703	(財)えひめ農林漁業担い手育成公社	089(941)2111
(財)山梨県農業振興公社	055(223)5747	(財)高知県農業公社	088(823)8618
(社)岐阜県農畜産公社	058(276)4601	(財)福岡県農業振興基金	092(641)7214
(社)静岡県農業振興公社	054(250)8991	(財)佐賀県青年農業者育成センター	0952(25)7118
(財)愛知県農業振興基金	052(951)3626	(財)長崎県農林水産業担い手育成基金	095(826)9524
(財)三重県農林水産支援センター	059(259)0855	(財)熊本県農業後継者育成基金	096(384)3333
(社)新潟県農林公社	025(281)3480	(社)大分県農業農村振興公社	097(535)0400
(社)富山県農業公社	076(441)7396	(財)宮崎県農業後継者育成基金協会	0985(26)8797
(財)石川21世紀農業育成機構	076(257)7141	(財)鹿児島県農業後継者育成基金協会	099(286)3152
(財)福井県農業公社	0776(21)5475	(財)沖縄県農業後継者育成基金協会	098(866)2280
(社)長野県農業担い手育成基金	026(236)2021		



北の大地をめざす人に 北のファーム・フェア

北海道は社団法人北海道農業担い手育成センターが中心になり新規就農に関する相談窓口、フェアの開催、農業体験実習などを行っている。同センターは、21世紀の北海道農業を担う若者を確保、育成してい



北海道芦別市の新規就農者誘致促進事業では水稲、メロン、馬鈴薯、食用ゆり、花卉栽培の農家が研修生を募集。農家で1~2ヶ月農業体験したあと、経営自立に向けて指導、助成してくれる。
☎01242-3-1111

くために市町村や関係機関によって設立された公益法人。全国の新規就農者の5分の1が北海道でその夢を実現しており、毎年100名以上が新規参入している。東京(有楽町交通会館)、大阪(梅田、大阪駅前第一ビル)、札幌(中央区プレスト)に常設の相談窓口を設けており、また年数回フェアを開催している。

「北のFARM・ingフェア」は毎年秋に2、3日間の予定で開催され、各市町村の農業担い手育成センターの担当者も参加するので具体的な情報が得られる。また農業体験実習セミナーも大阪などで開催している。
首都圏センター ☎03-3217-0278
関西センター ☎06-6344-2717
札幌センター ☎011-271-2255
<http://www.ninaite.or.jp/>

農業の基礎を学ぶ 就農準備校

(社)全国農村青少年教育振興会は、全国新規就農相談センター、都道府県青年農業者等育成センター、研修・就農受け入れ市町村のブースを設置し、将来農業をしたいと思っている人、就農する予定の人を対象に研修、就農に関する相談を行っている。

就農準備校は、農林水産省の支援で運営される学校で、講義と実習を組み合わせた研修を行っており、全国に10校16教室(平成14年度)あり、長期・短期のコースがある。主な就農準備校は、鱈淵学園、日本農業実践学園、テクノホルティ園芸専門学校、恵泉女学園園芸短期大学、八ヶ岳中央農業実践大学校で開催しており、他に(社)全国農村青少年教育振興会の教室が都内他に4校ある。毎年7月の夏休みに就農ガイダンスと就農準備校等の説明会、新規就農者と語るフェアを開催する。同会では全国どこでも農業の基礎を学べるEメール塾も開校している。

<http://www.agriworld.or.jp/sinkokai>
(社)全国農村青少年教育振興会・就農準備校
東京都千代田区神田司町2-1 神田中央ビル3階 ☎03-3291-5727

ハローワークが地方就職を支援

ハローワークの地方就職支援センターは、首都圏に住んでいる人の地方就職を支援する厚生労働省の機関だが、田舎暮らしや農業等への関心が高まるのを受けて農林漁業就職相談コーナーも開設している。しかし農業、林業、漁業の求人は多くが季節的

要因(収穫時期等の繁忙期)のみの臨時的募集)で、個人経営の場合は地元のハローワークに限って募集するケースが多い。そのためセンターで扱う求人は一年中仕事のある酪農関係が中心となるが、地方ハローワークに限った募集にも相談に応じてくれる。ハローワークみなと地方就職支援センター 東京都港区六本木3-2-21六本木ジョブパーク4階 ☎03-3505-8609
<http://www.u-turn.go.jp/>

農業法人へ就職を 希望する学生に

農業法人は、生産だけでなく、加工、販売、流通を含めて経営の多角化をはかっているところが増えており、就業規則も整備されている。農業を始めようとする若者の新しい職場として注目されており、大学生、専門学校生を対象に在学中に農業法人へ体験就業する制度を設けている。期間は1週間以上1ヶ月以内で法人への就職が前提。参加費は無料だが現地までの交通費は自己負担。問い合わせは全国農業会議所内・日本農業法人協会 ☎03-5156-0365

就農者や農家を対象に 農業大学校、研修農場

各都道府県にある農業大学校は、高校卒業生を対象にした2年間の実践的研修教育コース、短大卒業生を対象にした1年間または2年間のより高度な研修教育コース、就農希望者、農業者を対象にした短期研修コースがある。研修費は実費程度と安く、寮のあるところもある。問い合わせは都道府県の青年農業者等育成センター、農業会議所へ。

一方、研修農場は、市町村が研修圃場を設け、管理者や宿泊施設を併設している本格的な実践研修機関で、就農希望者を地域の農業後継者として受け入れている。研修は1~2年間で、農家での研修や地域活動への参加などを通じて地域住民との信頼関係を築くことも求められる。研修支援金が支給され、施設の利用費も実費程度になっている。本誌で紹介の月形町の花弁栽培研修農場もそんな一つ(p.4~7)。



全国過疎問題
シンポジウム
2003 in みやざき
(11月10日~12日)



メインテーマ

「小さな地域からの変革—住民参加による地域の新たな価値の創造と発信」

- ・11月10日(月) プレイベント
視察・夜学(北方町、五ヶ瀬町、高崎町、北郷町)
- ・11月11日(火) 全体会(宮崎観光ホテル)
基調講演/小川全夫(九州大学大学院人間環境学研究院教授)
パネルディスカッション 交流会
- ・11月12日(水) 分科会(宮崎観光ホテル)
第1分科会/地域資源を活かした産業おこしの方策
第2分科会/多彩な交流による地域の活性化
第3分科会/多様な主体の参画による地域づくり
パネルディスカッション

編集後記

今年は梅雨が長く、収穫予定のトマトの成長が遅く色付かないとスカイファームの人が心配していた。その後には台風も来たから、標高950mの山の上は大荒れしただろうと気になった。気象や自然の様々な異変に左右される農業。ハウス栽培が一般的に普及するようになったのも、安定的経営と病害虫を防ぎ極力農業を使わないための必須条件といえる。農業を使わない露地野菜が欲しいという消費者は農業現場の苦勞を殆ど知らないのだと思う。無農業野菜に取り組んでいるみなさん、頑張ってください!

農業法人の会社を作って新規就農の若者たちを受け入れている経営者たちが、農業の振興と地域の活性化の大黒柱になっていることを実感した。「若者が農業で食べていけるようにする」「自然や植物と共に暮らす生活は最高だ」「これからは一企業として税金も払い社会に貢献していく」等々、経営者たちは言葉少なに、しかし力強く語った。(a)

De POLA No.25

[でばら] 2003年秋冬号

発行日 / 平成15年9月5日
発行所 / 財団法人過疎地域問題調査会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門1-1-24
オカモトヤビル8階
☎03-3580-3070 FAX03-3580-3602
<http://www.kaso-net.or.jp/>
編集協力・印刷 / 株式会社ぎょうせい
編集工房アド・エー

農業を始めませんか!

農業の相談は
全国新規就農相談センターへ

サラリーマンなどこれまで農業をやったことのない人でも、農地を取得して農業を始めることが可能になった。しかし、実際にどこに買ったり借用できる土地があり、そのための資格や、営農に必要な技術や知識、融資制度の利用など専門的な情報が必要になる。

新規就農についての相談や各市町村等への紹介、研修、その他のあらゆる相談・アドバイスの窓口になってくれるのが、全国農業会議所内にある全国新規就農相談センター。

まず相談窓口を訪ねて、実現へ向けての情報を集める。ホームページでも主な情報が得られる。

同センターが製作した就農までのモデルケースによれば、(1)情報や基礎知識を収集する。相談センターは、都道府県にもあり、また全国農業会議所主催の「ニューファーマーズフェア」に参加すると、関係市町村や新規就農者を募集している企業、農業法人などと面談できる。(2)めざす農業ビジョンを明確にする。例えば、どんな作物を作るのか、施設栽培か露地か、農作業に従事する労働力は、どこに住みたいかなど。(3)必要な技術やノウハウを身につける。(4)資金の確保。必要な資金は、安定するまでの生活費は、融資の可能性は等。(5)農地・住宅の確保、機械や施設の確保。



民間の農業体験機関として最も歴史の古い「四国肱川皆農塾」。全国から年間を通じて研修生が来て自給自足の生活をしながら有機野菜、ウコッケイ等の卵づくりを学んでいる。千葉県から長期研修にきた女性と坂根塾長。
☎0893-34-2358

- (6)営農計画の作成。生産、販売、資金他。
- (7)農地の取得(就農する市町村の農業委員会が手続き)。(8)就農

全国新規就農相談センターでは、新規就農者を受け入れている市町村、農業実習をしている所等を紹介している。〒105-0001東京都虎の門1-25-5虎の門34MTビル全国農業会議所内(地下鉄銀座線虎の門下車徒歩5分)☎03-3507-3088相談用 <http://www.nca.or.jp/Befarmer/>

過疎地域観光振興広報ビデオ
全国広域観光振興事業

海の幸 山の幸

千葉県和田町
— 都会人が求める自然の恵み —
— 埼玉県吉田町 —
— 豊かな地域資源を盛りこす —

【制作趣意】
大都市の近くというメリットを活かした3つの過疎地の活性化の試みを取り上げて紹介する。都市の住人は過疎地の自然と生活文化の豊かさを満喫し、過疎地の住人は、都市の住人を迎えて生まれた新しい空気の中で元気になって行く。UターンでもIターンでもない都市と過疎地の町との交流による新たな共同作業である。

制作・著作 = 財団法人日本観光協会
企画・監修 = 全国過疎地域自立促進連盟
協力 = 国土交通省・総務省
制作 = 探映園社
撮影協力 = 千葉県安房郡和田町
埼玉県秩父郡吉田町

過疎地域観光振興
広報ビデオ

房総半島先端に位置する千葉県和田町、埼玉県の西端の吉田町は、それぞれ大都市に近いというメリットを活かした活性化の取り組みを行っています。

都市の住人は、過疎地の自然と生活文化の豊かさを満喫し、過疎地の住民は、都市の住人を迎えて生まれた新しい空気の中で元気になっていきます。

UターンでもIターンでもない都市と過疎の町の交流による新たな共同作業を紹介しました。全国でCATV放映中です。

カンジンなのは カンキンですよ。

当たりくじ

宝くじ

買ったから調べて早めに換金。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。

宝くじ

財団法人 日本宝くじ協会

宝くじのホームページ

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>

●外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。